

栗東町埋蔵文化財発掘調査

1997年度 年 報



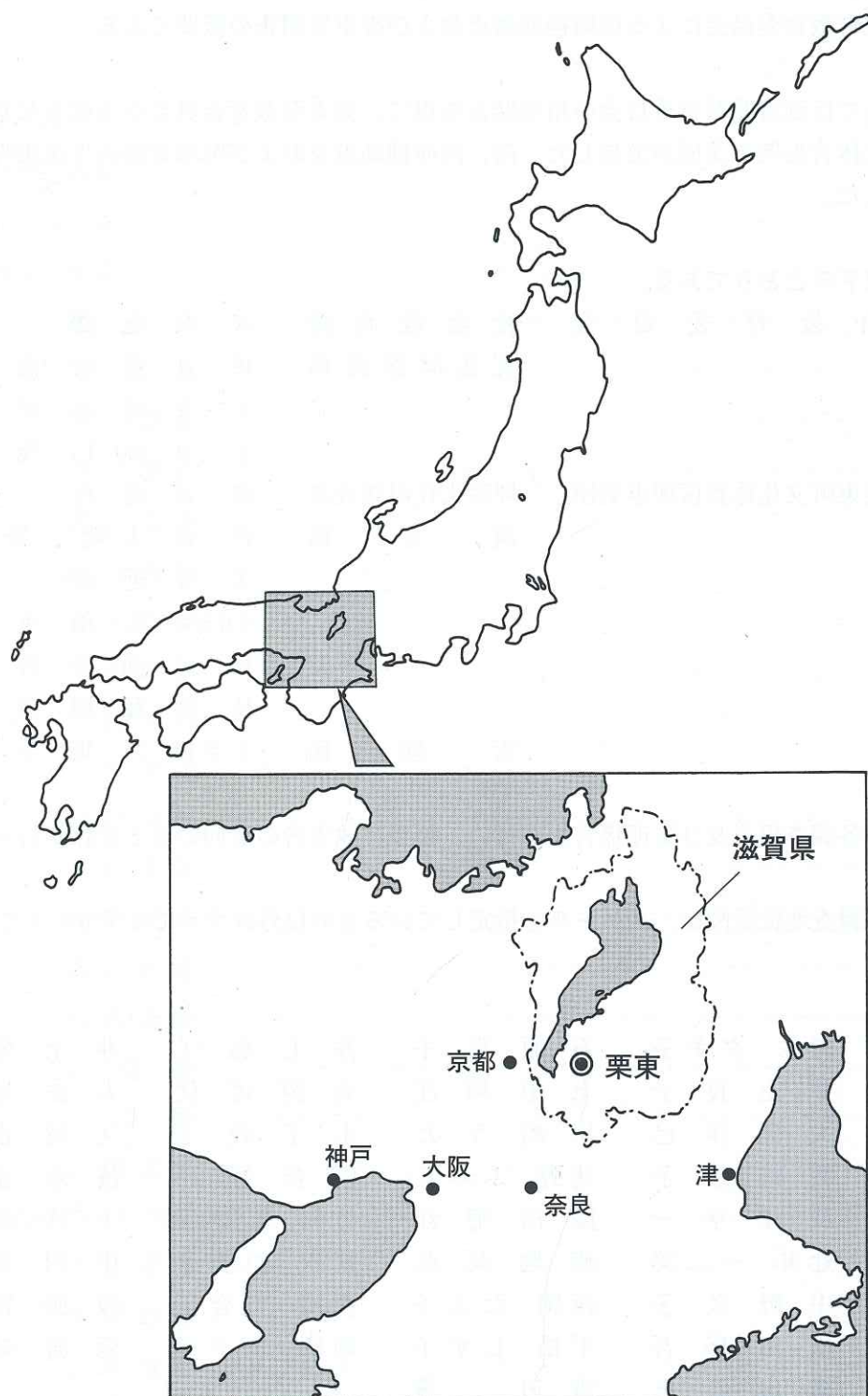
1999.3

栗 東 町 教 育 委 員 会
(財) 栗 東 町 文 化 体 育 振 興 事 業 団

表紙の写真 (上) 下鉤遺跡⑩
(大型建物周辺)
(下) 辻遺跡⑪
(1号配石遺構)

栗東町埋蔵文化財発掘調査

1997年度 年 報



1999.3

栗東教育委員会

(財)栗東町文化体育振興事業団

例

言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が受託した、1997年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助調査および町事業調査の概要である。
2. 調査にあたっては滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が主体となり財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助調査および町事業調査は栗東町教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

栗 東 町 教 育 委 員 会	社 会 教 育 課	課 長 乾 澤 亮
	文 化 財 保 護 係	係 長 奥 村 泰 祥
財団法人栗東町文化体育振興事業団		主 査 清 水 好 洋
		主 事 福 田 茂 幸
埋蔵文化財調査課	課 長 奥 村 明	
	係 長 大 崎 隆 志	
調 査 係	主 査 近 藤 広	
	主任技師 佐 伯 英 樹	
管 理 係	技 師 雨 森 智 美	
	技 師 藤 岡 英 礼	
	主事補 宮 川 圭 二	

4. 本書の執筆は各調査担当及び管理係宮川が行い、編集は執筆者の意向のもと近藤が行った。
5. 調査内容中の調査地位置図は、スケールを指定しているもの以外はすべて5千分の1である。
6. 調査参加者

現地調査作業	青 木 タキ子	石 原 恵 子	井 上 恵 子	井 上 妙 子
	井 上 良 子	上 田 和 江	大 岡 道 代	太 田 好 枝
	大 島 洋 己	川 崎 う た	木 下 政 子	久 徳 良 子
	教 野 妙 子	北 野 ふ み え	国 松 好 子	清 水 宏 行
	渋 江 亨 一	園 田 菊 江	竹 村 ヒロ子	千 代 清 美
	辻 井 一 二 美	徳 地 久 弥	富 田 由 美 子	中 村 典 子
	中 野 久 子	西 岡 た よ 子	西 田 百 合 子	牧 野 富 子
	松 田 盛 吾	平 松 し ず 子	堀 部 ア キ 子	森 野 靖 子
	横 山 こ と	渡 辺 薫		
	整 理 作 業	岩 根 隆 子	奥 村 美 枝 子	木 村 三 津 子
	宮 嶋 八 重 美	森 智 美		穴 戸 貴 子

目 次

例	言		1
目	次		2
事 業 報 告			3
栗東町遺跡地図			5
遺 跡 位 置 図			6
受託事業一覧表			8
① ②	縮 遺 跡		9
③	縮 遺 跡		12
④	野 尻 遺 跡		14
⑤	野 尻 遺 跡		15
⑥	野 尻 遺 跡		17
⑦	野 尻 遺 跡		19
⑧	手 原 遺 跡		20
⑨	下 鈎 遺 跡		21
⑩	下 鈎 遺 跡		22
⑪	小 柿 遺 跡		25
⑫	高 野 遺 跡		29
⑬	高 野 遺 跡		31
⑭	高 野 遺 跡		37
⑮	高 野 遺 跡		38
⑯	高 野 遺 跡		39
⑰	辻 遺 跡		40
⑱	辻 遺 跡		44
⑲	岩 畑 遺 跡		45
国庫補助事業・町事業一覧表			48
⑳	小 柿 遺 跡		49
㉑	手 原 遺 跡		51
㉒	狐 塚 遺 跡		52
職員の活動記録			53

事業報告

1. 発掘調査事業

今年度受託件数……19件

国庫補助・町事業調査件数……3件

2. 公表事業

— 現地説明会 —

・下鉤遺跡

期 日 8月16日(土) 10:00～11:00・14:00～15:00

参加者 326名

内 容 弥生時代後期の広縁構造をとる大型建物遺構と弥生時代中期の環溝から絵画土器を発見。

・小柿遺跡

期 日 1月17日(土)

参加者 125名

内 容 栗太郡の条里制を考える上で重要な白鳳から平安時代にかけての集落の発見と古墳群の確認。

・辻遺跡

期 日 2月29日(土)

参加者 126名

内 容 碧玉製玉作工房跡と石製合子の蓋片の発見

▼小柿遺跡現地説明会



▼辻遺跡現地説明会



3. 普及・啓発

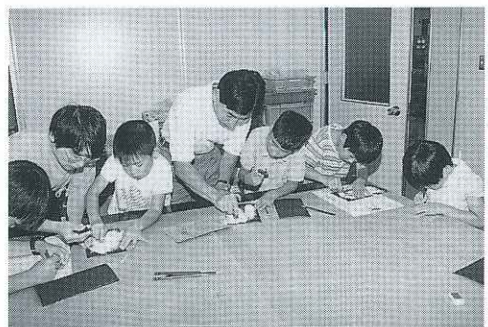
・子供考古学自由研究クラブ

期 日 8月2日(土)

参加者 42名(親子)

会 場 出土文化財センター文化財学習室

内 容 体験学習(勾玉製作)



・出土文化財センター講座

期 日 10月11日(土) 10月18日(土) 10月25日(土)

参加者 63名

会 場 出土文化財センター文化財学習室

内 容 ①「下鉤遺跡の大型建物」 ②「栗東の城郭」 ③「大岩山古墳群」

講 師 ① 大 崎 隆 志 (当事業団)

② 藤 岡 英 礼 (当事業団)

③ 進 藤 武 氏 (野洲町教育委員会)

・調査研究報告会

期 日 2月7日(土)

参加者 37名

会 場 出土文化財センター文化財学習室

内 容 「弥生時代の近江…環濠集落…」

講 師 横井川 博之氏 (新旭町教育委員会)

坂 本 正 裕 氏 (長浜市教育委員会)

川 畑 和 弘 氏 (守山市教育委員会)

松 村 浩 (栗東歴史民俗博物館)

検討会コーディネーター

山 崎 秀 二 氏 (守山市教育委員会)

・随時教室事業

会 場 出土文化財センター文化財学習室

件 数 18回 (治田小学校・治田西小学校・栗東中学校など)

内 容 町内遺跡の説明、調査スライド映写会等

・冊子等の発行

栗東町埋蔵文化財調査 1996年度 年報

はっくつ96 (パンフレット)

子ども考古学通信



◀町内遺跡の説明

和田古墳群見学説明会▶



4. 展示公開事業

・発掘調査成果展 (栗東歴史民俗博物館との共催)

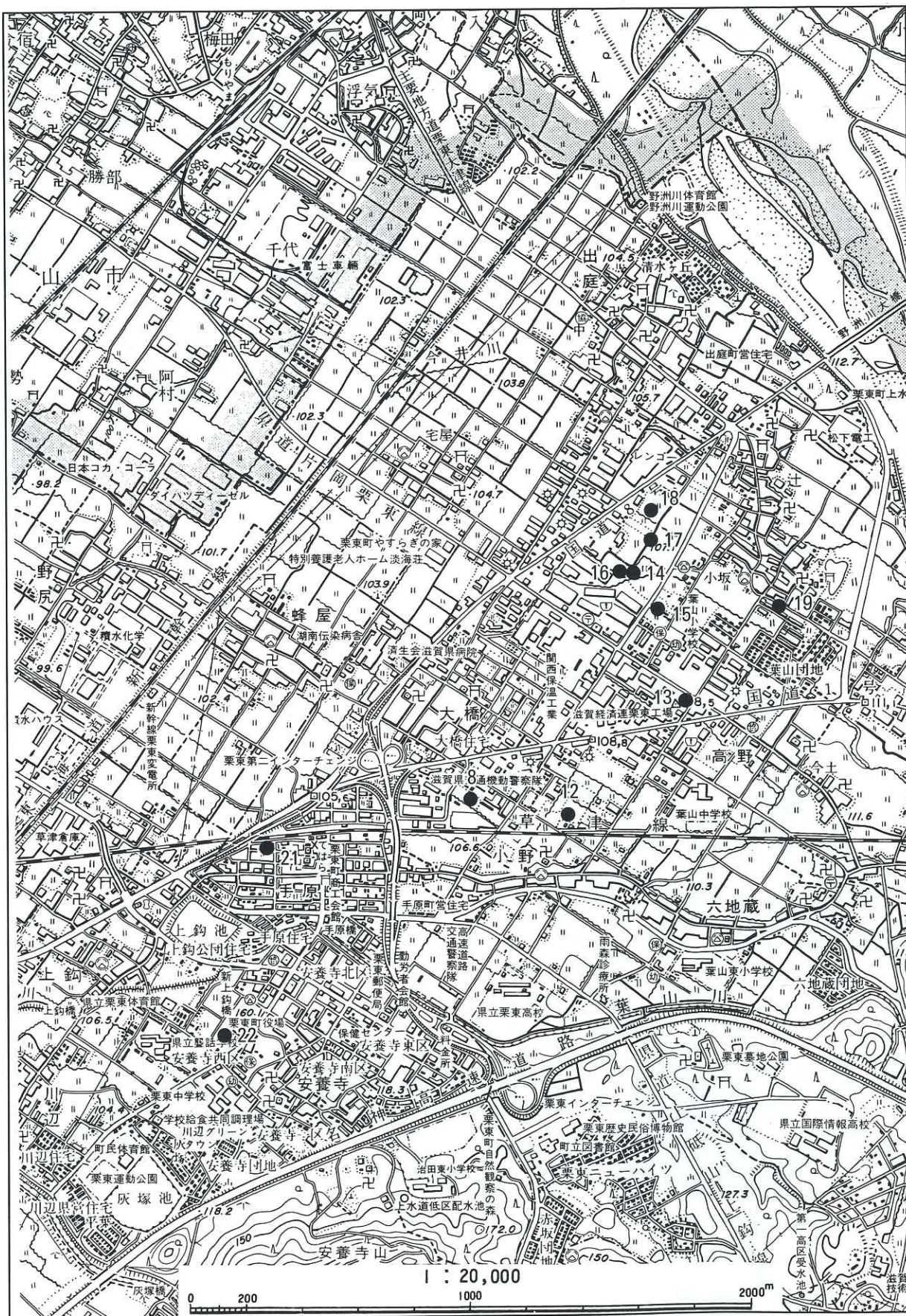
期 日 11月30日～1月18日

会 場 栗東歴史民俗博物館

内 容 1996年度の主要な調査成果の展示



遺跡位置図①



遺跡位置図②

財団法人栗東町文化体育振興事業団

埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査

1997年度受託事業調査一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査期間（現地）	原因	調査面積	調査結果	ページ	担当
1	縄	縄 南星塚762	970417～970530	民間造成工事	434㎡	方形周溝墓2基（弥生）	9～11	佐伯
2	縄	縄字南星塚762	970526～970616	民間造成工事	340㎡	方形周溝墓2基（弥生）	9～11	佐伯
3	縄	北中小路字稲木403	970924～971108	共同住宅建設	347㎡	掘立柱建物・溝（弥生） 掘立柱建物（平安）	12～13	佐伯
4	野尻	下鉤地先	970519～970603	河川改修工事	250㎡	溝（古墳） ピット	14	藤岡
5	野尻	野尻地先	970422～970630	公共造成工事	1400㎡	溝（古墳～平安） 旧河道（中世以降）・噴砂跡	15, 16	近藤
6	野尻	下鉤871-4	970722～970828	道 路 改 良	735㎡	掘立柱建物・ピット・溝（古墳～飛鳥） 井戸（近世以降）	17, 18	近藤
7	野尻	下鉤地先	971104～971212	道路改良工事	910㎡	溝・土坑・牛骨（平安～室町）	19	大崎
8	手原	大橋7丁目618-1	970417～970630	民間造成工事	128㎡	溝・ピット（奈良～江戸）	20	藤岡
9	下鉤	下鉤字島1090-1	970512～970605	共同住宅建設	299㎡	方形周溝墓3基（弥生） 掘立柱建物（中世）	21	大崎
10	下鉤	下鉤1214	970618～970821	共同住宅建設	495㎡	環溝・大型建物（弥生）	22～24	大崎
11	小柿	小柿4丁目315-1・316-1	971118～980123	事務所建設	450㎡	方墳（古墳） 掘立柱建物（平安）・旧河道	25～28	藤岡
12	高野	高野871	970714～970822	事務所建設	380㎡	溝・土坑（奈良～鎌倉）	29, 30	藤岡
13	高野	高野字高関203-1	970908～971031	寮棟建設工事	472㎡	竪穴住居・掘立柱建物 土坑・溝（古墳）	31～36	藤岡
14	高野	高野字サルガウ598	970929～971031	倉庫建設工事	263㎡	土坑・溝（縄文～江戸） 噴砂跡	37	近藤
15	高野	高野575	971024～971107	事務所建設工事	120㎡	竪穴住居・土坑（古墳）	38	大崎
16	高野	辻616	971202～971216	事務所建設（代替）	200㎡	掘立柱建物（平安） 噴砂跡	39	近藤
17	辻	辻ミノリ・高野サルガウ	971117～980331	保留地工事	1106㎡	配石遺構（縄文）・竪穴住居・溝（古墳） 掘立柱建物（奈良）	40～43	近藤
18	辻	辻地先	980209～980331	保留地工事	514㎡	流路4条（古墳～中世）	44	大崎
19	岩畑	高野467-2他	970722～970831	道 路 改 良	240㎡	竪穴住居6棟 ピット（古墳～飛鳥）	45～47	佐伯

① ② 縄 遺 跡

調査地 栗東町大字縄字南星塚762地

調査期間 1997年4月17日～6月16日

調査面積 774m²



調査地位置図

縄遺跡は野洲川左岸扇状地中位の標高約95m前後の微高地上に立地する。遺跡の範囲は中山道沿いの大字縄から大字北中小路に広がり、これまでの調査により遺跡の内容は、主に中近世の集落域と弥生時代後期の方形周溝墓群から成る墓域として周知されていた。前者は14世紀以降の集落で、現在の北中小路の集落と重複していて、その集落を囲む幅2～5mの環濠が長さ60mにわたり検出されている。

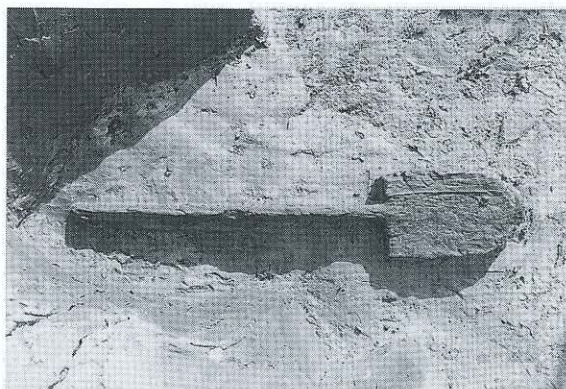
弥生時代後期の墓域は、守山市に近い遺跡の北側微高地頂部に分布しており、これまでに長さ200m、幅70mに及ぶ範囲で13基の方形周溝墓が確認されていた。周溝墓の規模は一辺10～20mで、全容の不明なものを除き全てが、コーナー部または一辺の中央に陸橋を持つもので、その中には陸橋部を外側へ拡張する、いわゆる前方後方型周溝墓の初源的な形態のものも(SX1、SX5)みられる。

今年度の調査は774m²の調査区で第1次(東側434m²、4月17日～5月26日)と第2次(西側340m²、5月26日～6月16日)で発掘調査を実施した。

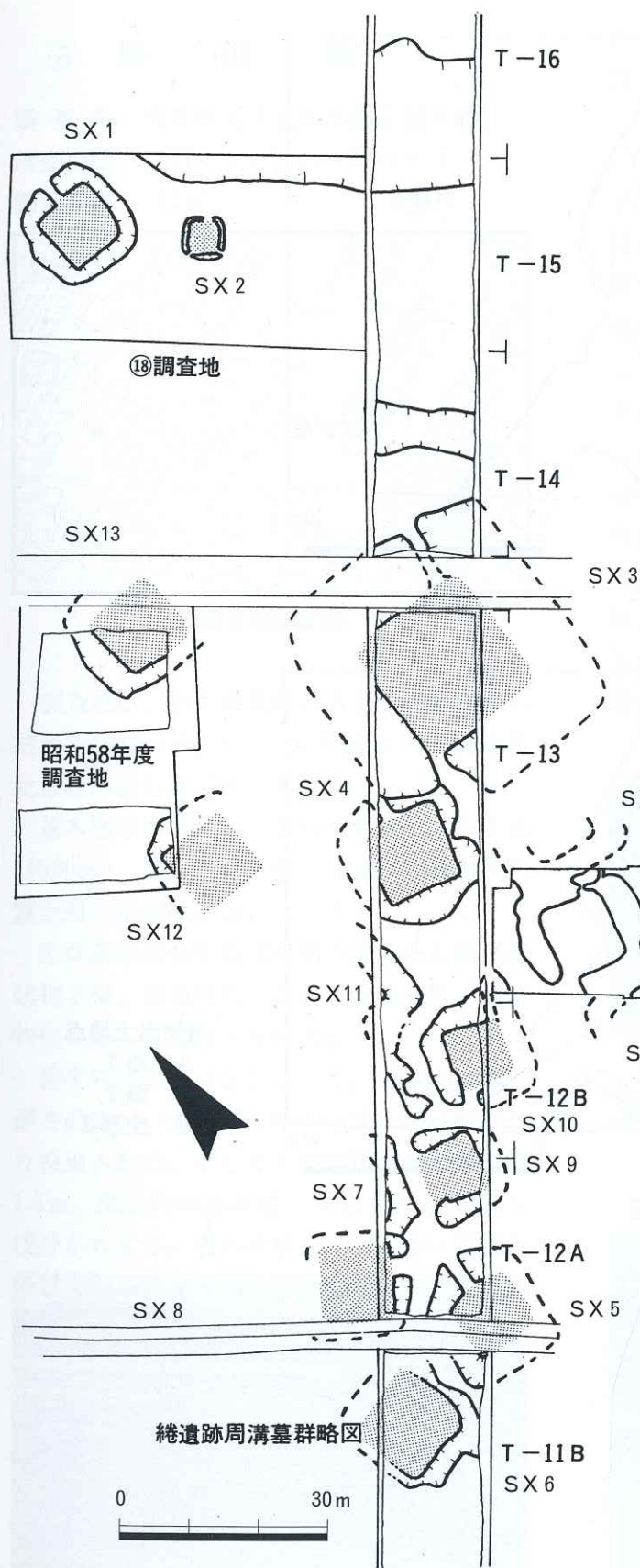
基本層序は上層から黒灰色の水田耕作土層(約20cm)、黄灰色土層(約20cm)、茶褐色土層(約20cm)、地表面から約60cmで灰色粘質土の地山(遺構検出面)に至る。検出した遺構は方形周溝墓4基である。調査区東端の落ち込みは1989年度に調査されたSX10の周溝南端で、その他3基は新たに発見されたものである。全容のわかるSX14は一辺10m、周溝の幅3～5m、深さは最深部で90cmを計る。深い部分の周溝断面形態は、外側がなだらかな傾斜をみせるのに対し、最下層のマウンド側はほぼ垂直に掘り込まれている。周溝埋土は上層から黒色粘質土層、黒灰色粘土層、有機質を含む暗灰色粘土層で、最下層のマウンド側には盛り土が崩落したとみられる地山のブロックが認められた。

東西の対角するコーナーに陸橋を設け、北側周溝はSX15、南側周溝はSX16と周溝を共有している。主体部は確認されなかった。なお南側周溝SX16の周溝は地山面が礫層であったためか掘り込みは約10cm程の浅さであった。出土遺物は少ないがSX14周溝底から弥生時代後期前半の受口状口縁壺1個体と一木の直伸鋤が1点出土。SX15からも一木の直伸鋤1点が出土した。

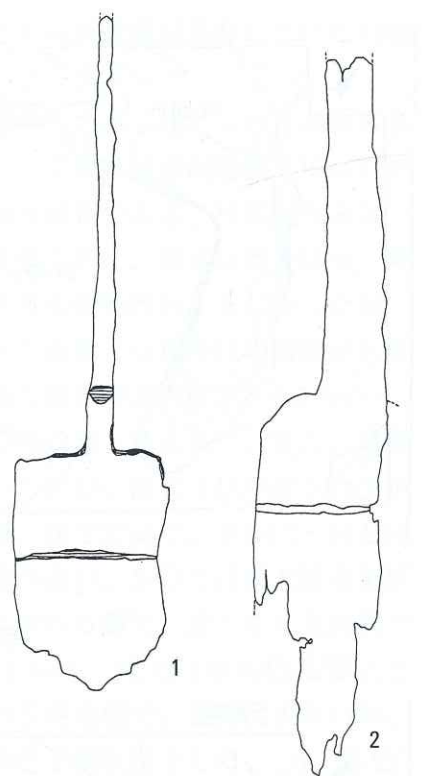
(佐伯)



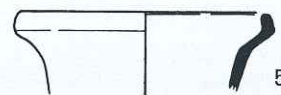
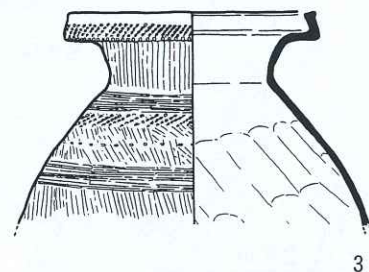
SX14 鋤1出土状況



縹遺跡周溝墓群配置図
(平井寿一 1989年度年報⑱ 一部改変)



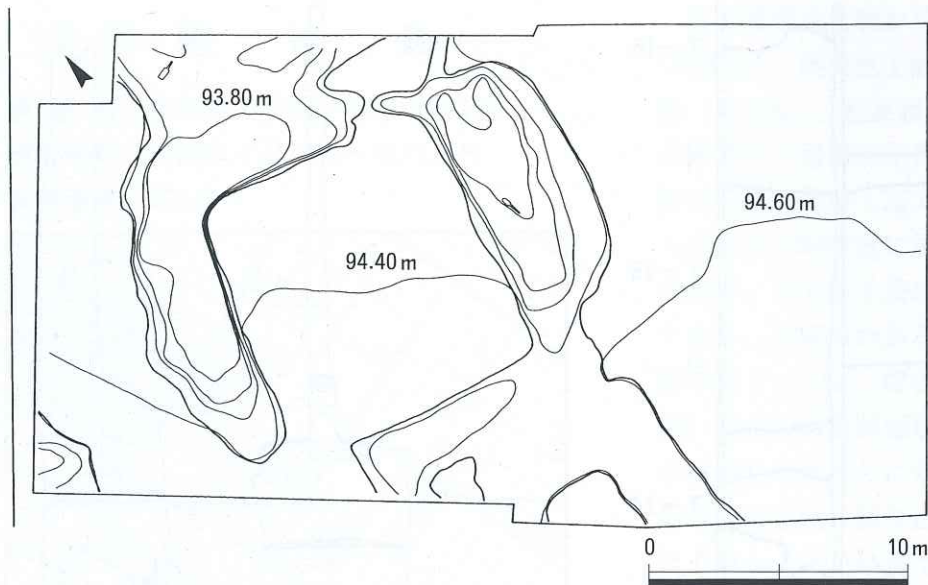
0 20 40cm



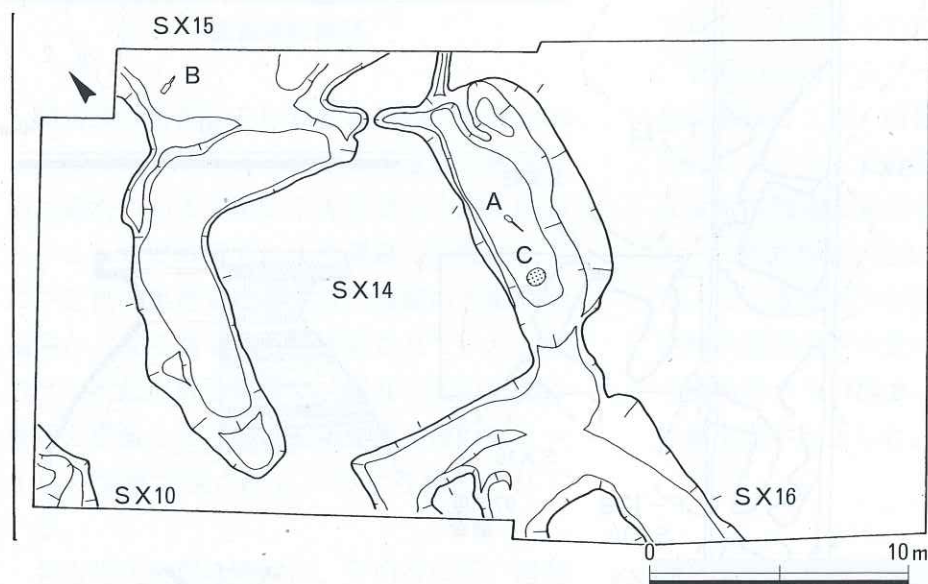
0 10cm

出土遺物実測図

- | | |
|------------|------------|
| 1 鋤 SX14出土 | 4 SX15出土 |
| 2 鋤 SX15出土 | 5 壺 SX16出土 |
| 3 壺 SX14出土 | |



等高線測量図



遺物出土地点

A 鋤 1

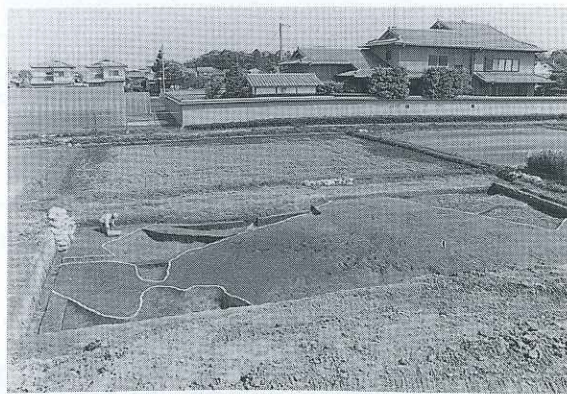
B 鋤 2

C 土器 3

調査地遺構図



SX14 周溝西辺



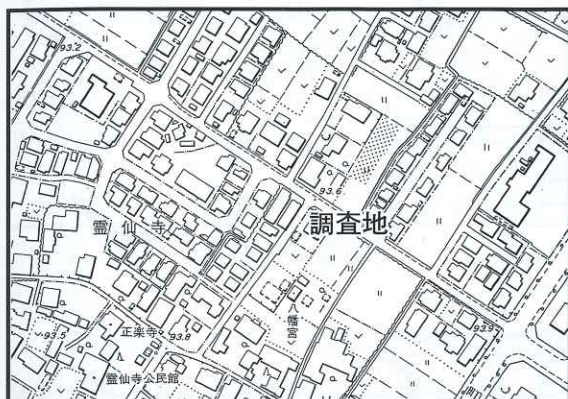
SX14 東南側

③ 総 遺 跡

調 査 地 栗東町大字北中小路字稲木403

調査期間 1997年9月24日～11月8日

調査面積 347㎡



調査地位置図

調査地は、前記総遺跡の方形周溝墓群から南西約400mの地点で、大字霊仙寺の現集落北東部に接した場所にあたる。

基本層序は上層から黒灰色の水田耕作土層（約20cm）、黄灰色床土層（8cm）で黄灰色粘質土層の遺構検出面にたつする。

主な遺構は弥生時代後期の溝2条と掘立柱建物1棟、奈良時代の高床式倉庫2棟、鎌倉時代の溝・柱穴などを検出した。

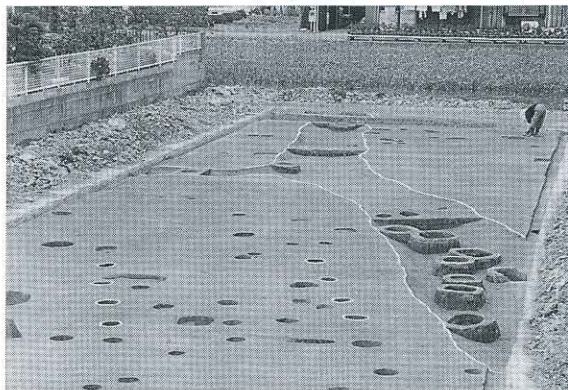
弥生時代の溝（SD2）は、幅1.8～2.8m、深さ約20cm、調査区の南から北へ30mにわたり検出された。そしてその中程からは幅1～1.5m、深さ約10cmの溝（SD3）が西側へ枝分かれする。溝の堆積土は、上層は黄灰色砂質土で下層は黒褐色粘質土である。遺物は下層から出土した。SB15は梁間が1間で3.5m、桁行きは3間で3.8m。面積約13.3㎡の掘立柱建物である。柱穴掘り方は直径約30～35cm、深さ24～39cm、柱の推定直径は約15～20を計る。南妻側中央外の柱は棟持柱になる可能性がある。柱穴埋土は黒褐色土で方位や柱配置から溝と同時期の掘立柱建物と考えられ、溝との間隔は1mと近すぎるが、溝出土の弥生土器のほとんどがこの建物に接する地点で

出土することから両遺構は併存していた可能性も考えられよう。

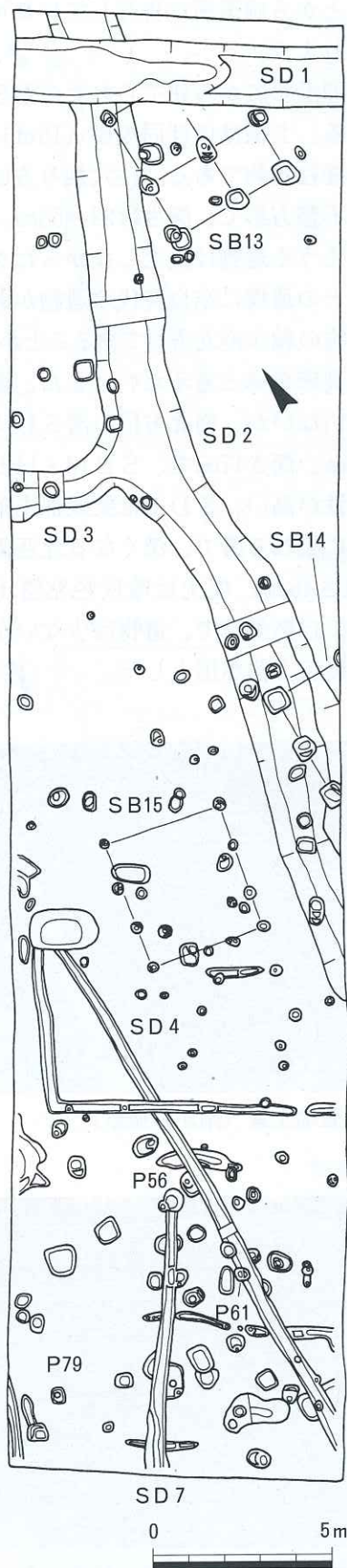
SD2が埋没してから建てられたのがSB13・14である。2棟はほぼ同規模（15㎡）で2×2間の総柱建物である。柱穴掘り方は一辺約60cmの不整形で、深さは22～53cm。時期決定に耐えうる遺物は出土しなかったが、他の柱穴などの遺構に奈良時代の遺物があることと、建物の軸が南北方位であることから、奈良時代の高床倉庫と考えたい。また、遺物は出土していないが、南北方位の溝SD4がある。幅55cm、深さ17cmで、SB13・14と同時期の可能性が高い。SD1は栗太郡主条里と同一方向に流れる溝で、深くなる北西側で幅1.8m、深さ45cm。埋土は暗灰色粘質土と灰白色砂粒の自然堆積で、遺物は少ないが、鎌倉時代の黒色土器が出土した。（佐伯）



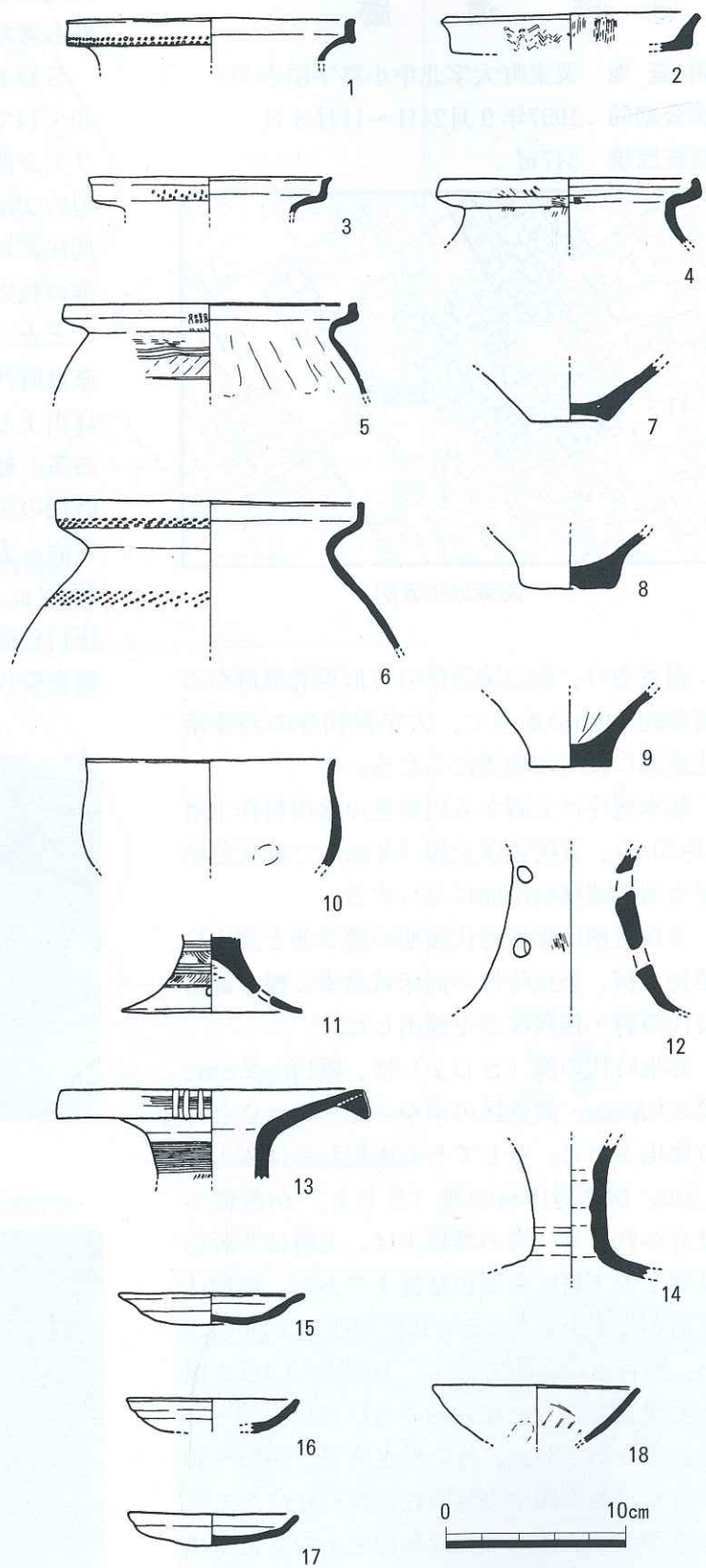
調査地全景（南から撮影）



弥生時代の遺構 SB-15、SD-2



調査地遺構図



1~13 SD-2、 14 P-79、 15 P-61
16 P-56、 17 SD-7、 18 SD-1

④ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鉤地先

調査期間 1997年 5月19日～6月3日

調査面積 240m²



調査地位置図

本調査地は、河川付け替え工事に先立つ発掘調査であり、2箇所にトレンチを設定した。

調査区の基本層序は、表土面から層厚30cmの灰褐色粘質土（耕土）とその直下に黄褐色系粘質土の遺構面（地山）が存在する。

主要遺構の概要

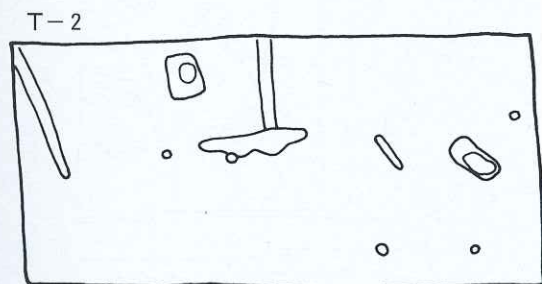
トレンチ1：黄褐色系粘質土の地山上に、溝・土坑・ピットが存在する。

ピットは時期を判断する遺物に恵まれないが、埋土は灰色系粘質土であり、後述する古墳時代の遺構埋土と異なる。過去の周辺の調査を勘案すれば、中・近世の所産と思われる。

溝（SD-1）は茶褐色系粘質土を上層、砂質土層を下層とする。遺物には古墳時代前期の甕などがみられる。また、下層からは、縄文時代と思われる石鏃が出土した。

溝出土遺物の大多数が古墳時代であり、石鏃の出土は混入であろう。

トレンチ2：ピット・溝を検出した。遺構

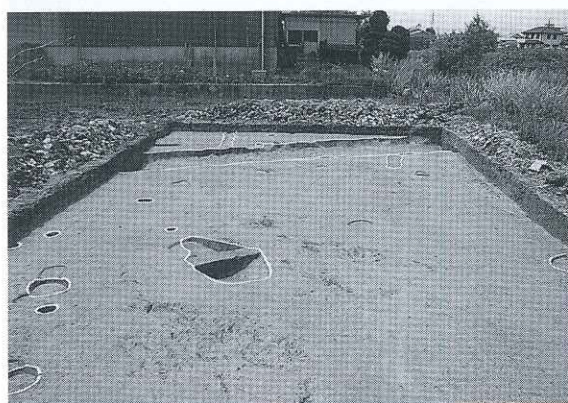


の埋土は灰色系粘土であり、中・近世の造成であろう。明確な遺物は出土しなかった。

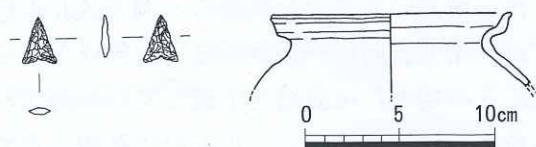
まとめ：本調査区は、建物跡は見られず、溝の存在を重視した生産地としての性格が強いと思われる。

野尻遺跡は、下鉤と守山市伊勢の二つの台地に挟まれた低湿地帯で、遺構密度は希薄だが、調査地周辺では古墳時代頃から、生産地として開発が始まったと思われる。

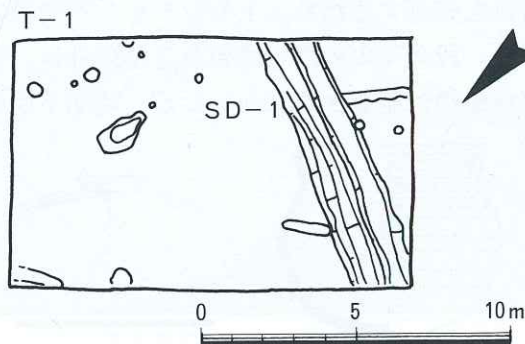
（藤岡）



トレンチ1全景



トレンチ1 SD1出土遺物実測図



調査地遺構図

⑤ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字野尻地先

調査期間 1997年4月22日～6月30日

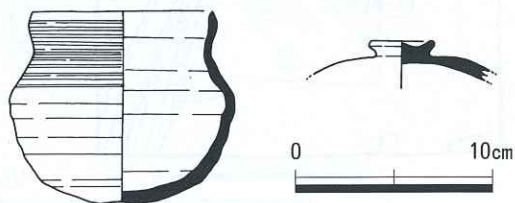
調査面積 1400m²



調査地位置図

今回の調査は、栗東町の計画する都市計画道路下鉤千代線の工事に先立つ調査である。

検出された遺構は、古墳時代後期から近世以降にいたるものである。古墳時代の遺構としては、中央付近に存在する幅2～4m、深さ0.5～1mの溝3条(SD101、201、SD202)を中心に、それらの支流も含めた、幅のせまい浅い溝がいくつか存在する。調査区北東側には、南北方向に一段低くなった部分がみられ、この場所には流路を形成していた跡がみられる。段差の境には、平安時代後期と考えられる溝(SD107)が流路の流れる方向に沿って存在する。また付近には、方位を何回か変更させて存在した中世以降の耕作痕が何条かみられる。さらに下層面における遺構の有無を確認するため、トレンチを2ヶ所設定した。段差下の流路と思われる跡以外は、明確な遺構は確認されなかったが、時期不明の

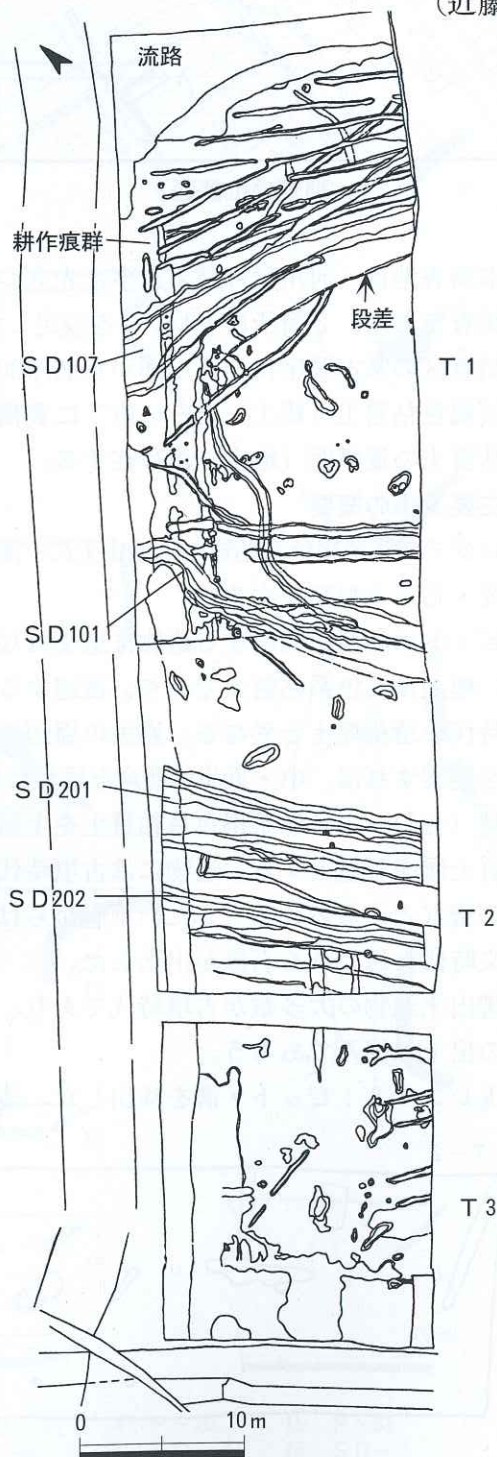


T1 SD101出土遺物

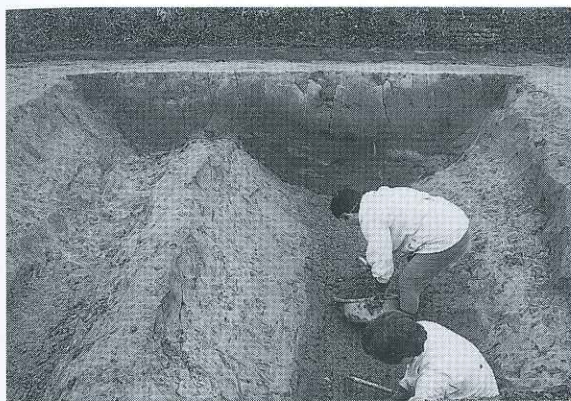
噴砂跡が2条確認された。

上層面で、加工痕を残すサヌカイト片や、石錘、石鍬がわずかであるが出土していることから、縄文集落が存在しないまでも、周囲の環境を考慮すれば、この付近が狩猟、採取の場として存在していた可能性が考えられる。

(近藤)



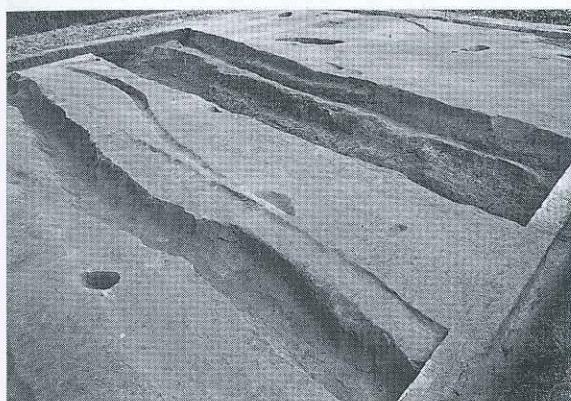
調査地遺構図



T 2 S D 201作業風景



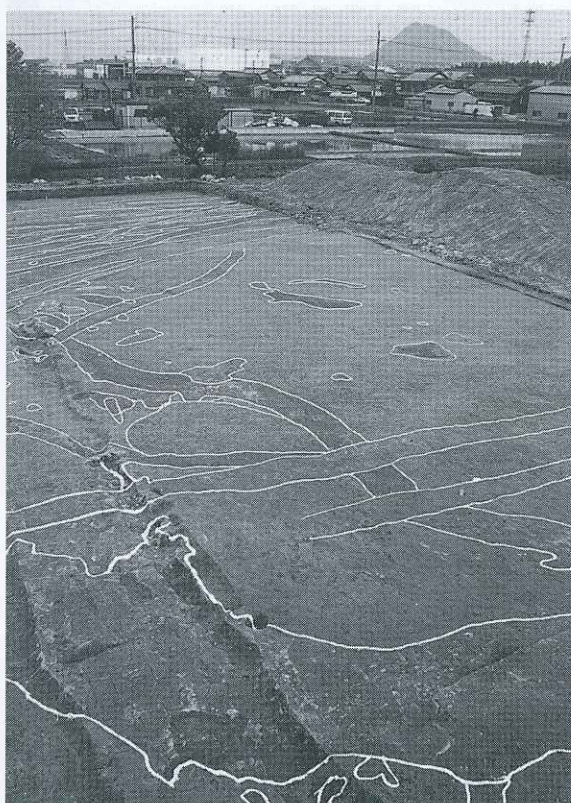
T 1 S D 101出土土器



T 2 S D 201、S D 202



T 1 S D 107周辺作業風景



T 1 遺構検出状況



T 1 S D 101 (西方向から)

⑥ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鉤871-4 他

調査期間 1997年4月22日～8月28日

調査面積 735㎡



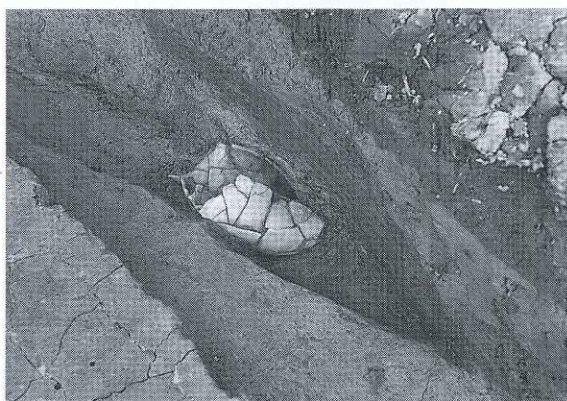
調査地位置図

栗東町が計画する都市計画道路下鉤千代線の工事に先立つ調査で、今年度の第2次調査である。確認された遺構は、古墳時代と考えられる掘立柱建物、溝、柵列の他、近世以降の井戸等が存在する。溝(SD-101)は、1994、1995年度で確認されているSD-101の続きで総長70m以上にわたって存在している。溝幅は1.4～1.8mで、深さ80cm前後を計る。時期は出土遺物より6世紀後半～7世紀前半頃と考えられる。掘立柱建物(SB-1)は、SD-101の南に存在する3×2間以上の建物である。東辺中央付近の柱穴は、2つが近接する位置に存在し、入口に関連する特殊な構造であろうか。建物が築造された時期は、出土遺物がないため断定できないが、SD-101とほぼ同一方向に存在し、埋土が比較的類似していることから、とりあえずSD-101とほぼ同時期の所産と考えておきたい。

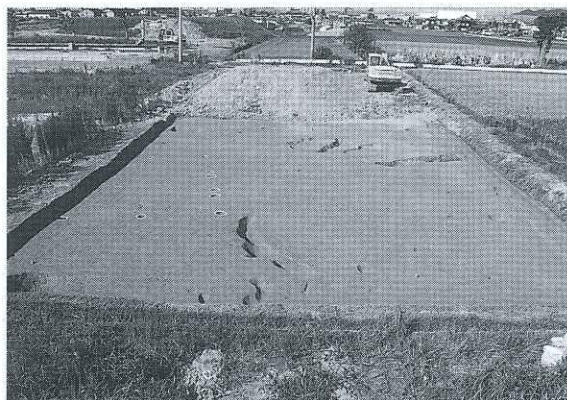
今回の調査地周辺における過去の調査成果では、明確な建物がわずしか確認されておらず、まとまった集落を形成していた様子はみられない。今回の調査でも建物が1棟確認されたにすぎず、このあたりは、溝、川、耕作痕が比較的多く確認されていることから、農作業に関連する地域であったことが伺える。(近藤)



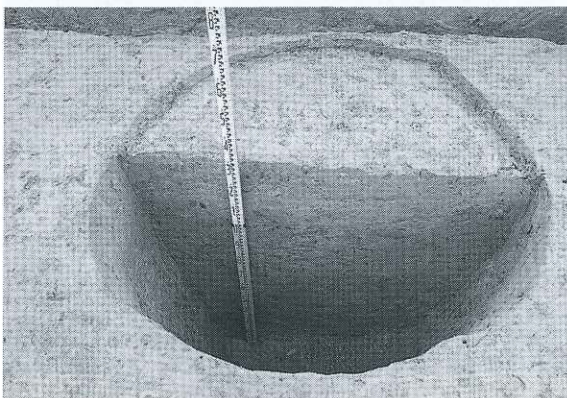
SD101周辺作業風景



SD102土師器出土状況



調査区南側半分全景



井戸(SE)半割状況

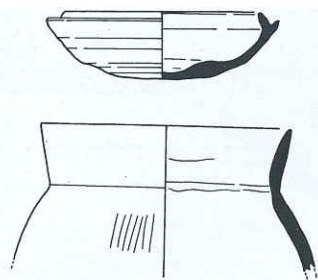


図1 S D101出土土器

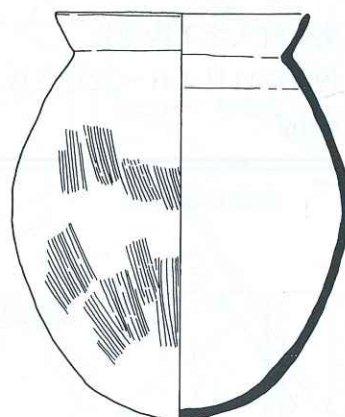
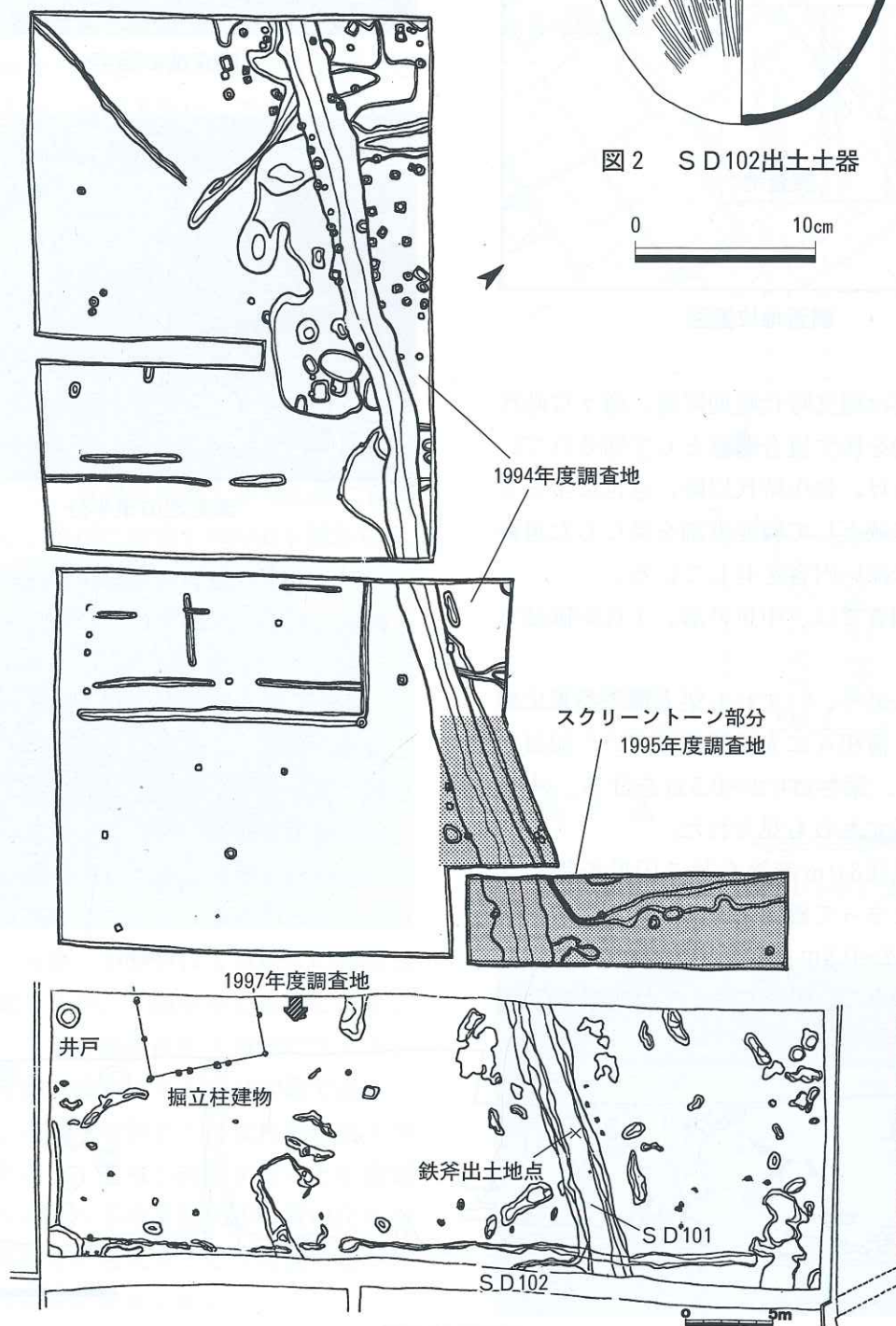


図2 S D102出土土器



1997年度調査地遺構図と1994・1995年度調査地遺構図

⑦ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鉤地先

調査時期 1997年11月4日～12月12日

調査面積 450m²



調査地位置図

野尻遺跡は縄文時代晩期以降、様々な時代の遺構遺物を残す複合遺跡として知られている。とりわけ、弥生時代以降、近世に至るまで主に生産域として機能役割を果たした遺跡として興味深い内容を有している。

今回の調査では、中世の溝、土坑が確認されている。

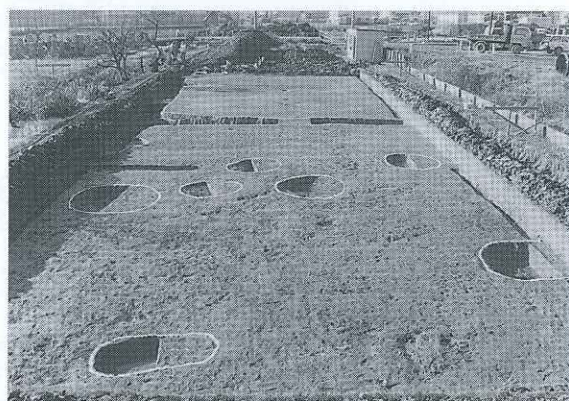
溝は5条あり、いずれも栗太郡主条里に規制される。溝相互に先後関係はない。幅員は0.5～1.0m、深さは0.2～0.5mを計る。中に牛骨片を残すものも見られた。

土坑は直径3.0m前後を計る円形を呈し、数基がまとまって確認された。断面は台形状で深さは0.2～0.3mを計る。若干の土器片が出土したのみで、性格については明瞭でない。

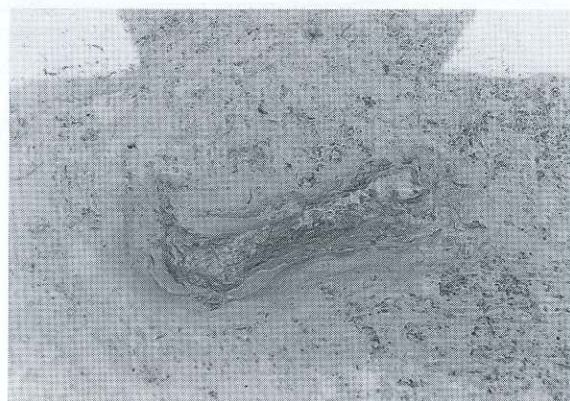
(大崎)



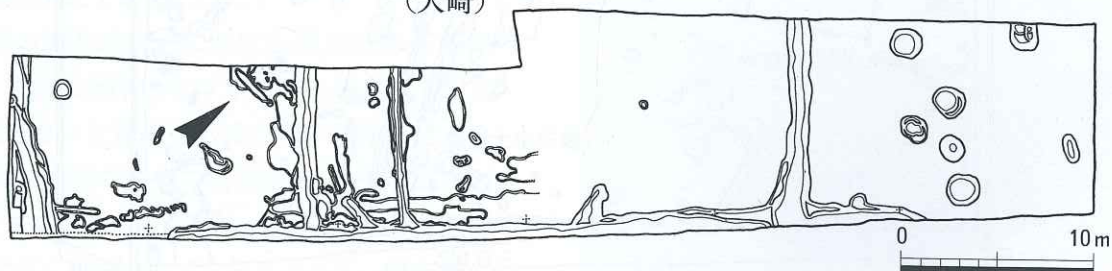
調査地の西半分



調査地の東半分



牛骨片



調査地遺構図

⑧ 手原遺跡

調査地 栗東町大字大橋7丁目618の一部

調査期間 1997年4月17日～4月23日

調査面積 128m²

はじめに：当調査地は、寺院・官衙の存在が指摘される手原遺跡の中で、最も北東側に位置し、高野遺跡に隣接する地点にある。

手原遺跡は正南北方向の地割りを残すことで知られるが、当調査地は、その地割から北東へ300m離れた地点にある。

調査地は栗太郡主条里に規制された田地であるが、手原遺跡の地割り・建物範囲の確認が、主として遺跡範囲の北側で行われてきたことから、今回の調査は遺跡の広がりを知る上でも重要な地点になると思われる。

主要遺構の概要：調査は2カ所のトレンチを設定して行った。検出した遺構は、4条の溝・ピットで、黄褐色粘質土の地山層に構築されている。黄褐色粘質土の30cm下層からは、手原遺跡中心部の遺構面に近い土質を持つ、茶褐色粘質土のベースを確認したが、遺構・遺物の検出には至らなかった。

検出した溝は、青灰色粘質土層（上層）と青味を帯びた茶褐色粘質土（下層）の堆積土を持つ。下層の堆積土は、一部で上層を取り巻くように存在するため、上層の堆積土は、下層の溝を掘り直した後に堆積したと思われる。溝の構築時期を確定する遺物は認められなかった。SD-1からは8世紀代の須恵器を一点確認したが、上層からの出土である。

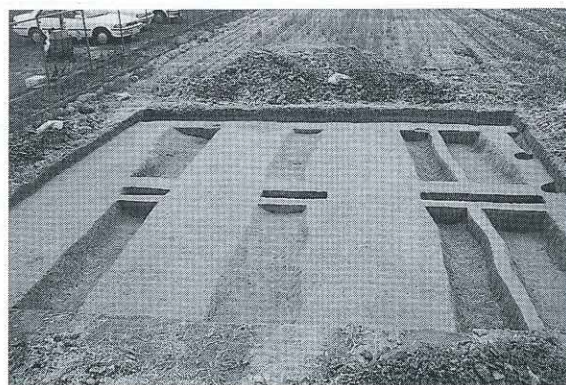
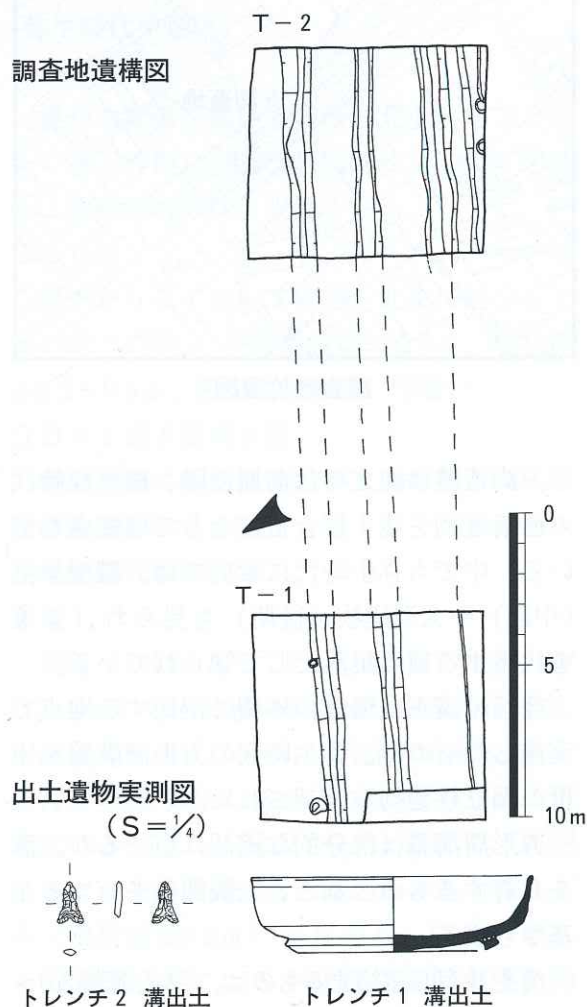
まとめ：今回の調査は出土遺物に乏しく、溝の構築時期を確定することは困難である。

しかし、茶褐色粘質土上に黄褐色粘質土が堆積し、その上に遺構が展開することを確認した。これにより手原遺跡周辺の耕地化について、時期設定を考えることは可能と思われる。今後の調査に期待したい。

（藤岡）



調査地位置図



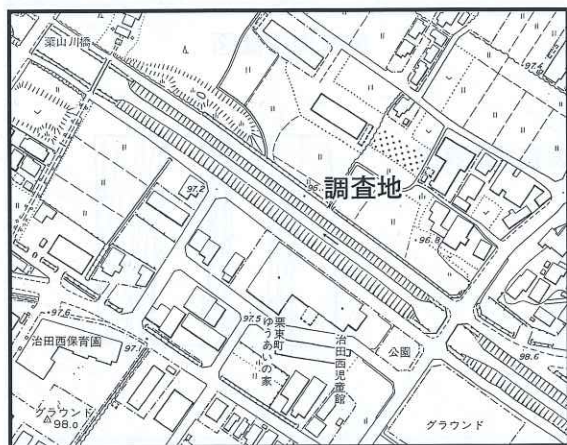
トレンチ2 全景

⑨ 下 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鈎字島1091-1

調査期間 1997年 5月12日～6月5日

調査面積 299m²



調査地位置図

下鈎遺跡は縄文時代前期以降、様々な時代の遺構遺物を残す複合遺跡として周知されている。中でも弥生時代においては、環濠集落(中期)や大型建物(後期)も見られ、栗東を代表する拠点集落として知られている。

今回の調査は環濠の外側に南接する地点で実施したもので、弥生時代の方形周溝墓や中世の掘立柱建物が確認された。

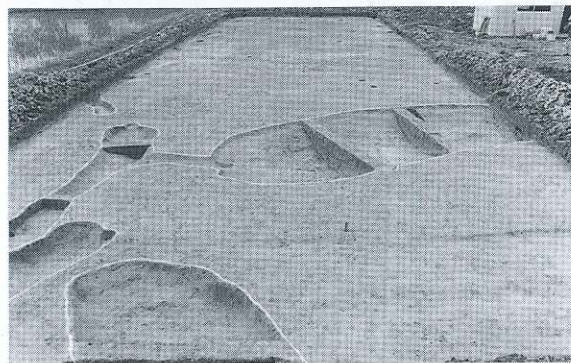
方形周溝墓は部分的な確認に留まるが、溝を共有するもの2基と、先後関係を有する1基から成る。

溝を共有し連結するものは、現状溝幅2.0～3.0mを計り、南西隅部に2.5m幅の陸橋部を

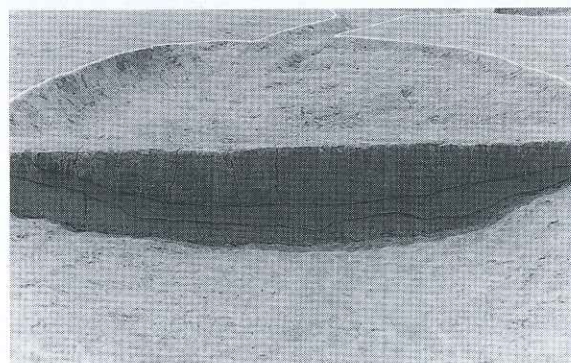
持つ。

上記一群に後出するものは現状溝幅0.5mを計り、北溝ほぼ中央に0.5m幅の陸橋部を持つ。

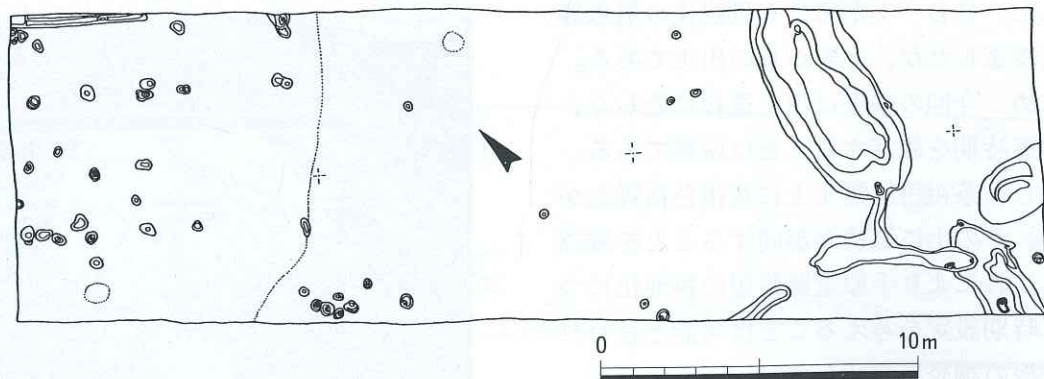
出土遺物は近江受口状口縁甕1個体にとどまる。時期的には弥生後期初め頃に位置づけられる。
(大崎)



調査地全景



方形周溝墓



調査地遺構図

⑩ 下 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鈎1214番地

調査期間 1997年 6 月24日～ 8 月21日

調査面積 495m²



調査地位置図

下鈎遺跡は縄文時代前期以降、様々な各時代の遺構遺物を残す複合遺跡として周知され、とくに弥生時代中・後期については野洲川左岸地域（旧栗太郡域）における拠点集落として知られている。

今回の調査ではその内容をさらに補強する新たな知見が得られた。以下にその概要を記述する。

〈要 旨〉

(1) 弥生時代中期末の集落北西端を画する2条の環溝が発見され、集落規模径400mを計る大規模なものであることが確認された。

また、環溝（SD01）内からは高床式建物を描いた絵画土器片（壺）も出土した。

(2) 平成4年度調査に続いて高床式の大型掘立柱建物（弥生時代後期後半）が発見され、伊勢遺跡とともに野洲川流域において特異な位置を占める遺跡であることを改めて再確認させるものとなった。

また、確認された大型掘立柱建物についてみれば、

1. 他に類例のない広縁付き構造を取る。
2. 建物に取り付く出入り口梯子の位置が

確定できる。

3. 付帯する区画塀やL字形に配された別の建物も見られ、建物群の構造や構成の一端を窺うことができる。

等、弥生期の大型掘立柱建物の機能や性格を考える上で興味深い内容を有している。

〈主たる遺構・遺物の概要〉

（弥生時代中期末）

SD01

緩やかな弧を描いて南西～北東に延びる2条の溝（外側）。現状幅員2.5m、現状深さ0.5m、断面逆台形状、空濠。

SD03

緩やかな弧を描いて南西～北東に延びる2条の溝（内側）。現状幅員1.3～2.0m、現状深さ0.2～0.5m、断面逆台形状、空濠。

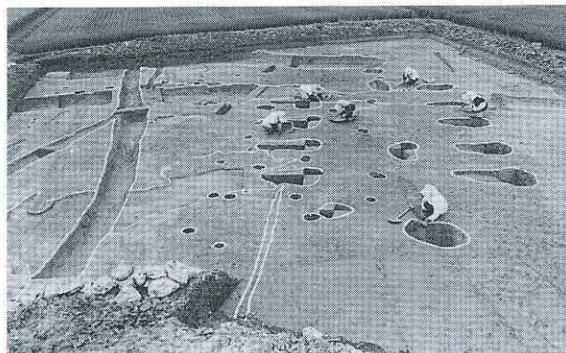
SD01出土絵画土器

壺頸肩部に寄せ棟構造の上屋を持つ高床建物を線刻したもの。

（弥生時代後期後半）

SB1

桁行4柱間（桁行7.6m）、梁間1柱間（梁行5.05m）の南北棟の高床式独立棟持柱建物。床面積は約40m²。南面に1柱間の広縁を持つ。桁行き柱間寸法は1.9m。柱穴掘り方は一辺現状0.8～1.2m、同深さ0.7mを計り、両側柱では、その西側に落とし込みの為の掘りこみ（現状幅員0.6m）を有する。柱はいずれも抜き取られているが底部に礎板を残す例（5カ所）があり、側柱径0.4～0.45m棟柱0.30～0.35mと推定される。



調査地全景

石敷きピット (梯子基礎)

SB01の南妻に近接する掘り方径0.6mのピット。底側部には径0.2mの範囲で河原石(栗石)による根固めを施している。

区画堀(板堀)

西側柱南端から南に延びる現状幅員0.2mの溝。厚さ4cm幅0.5~0.7m程度の板材を矢板状に打ち込んだ痕跡を残す。

SB02

SB01の東側にL字状に配された建物。桁行3柱間以上(桁行4m以上)、一部のみの確認であるが、梁間2柱間(梁行8.4m)の東西棟の建物と推定される。

SD02

SB01の西側をほぼ並行して延びる溝。現状幅員0.8m、現状深さ0.3m。

〈おわりに〉

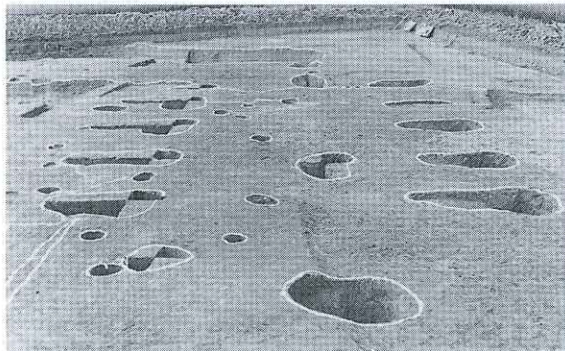
以上、今回の調査概要を記述した。最後に野洲川地域における今後の見通しに若干触れ、結びとしたい。

(1)について

従来より知られてきた二ノ畦・横枕遺跡に代表される旧右岸地域(旧野洲郡域)と肩を並べる勢力(集落)を野洲川旧左岸地域(旧栗太郡域)においても、想定することが可能となり、近江の『クニ』の中心とされる当該期の野洲川流域の様相について新たな視点からの検討が必要となろう。

(2)について

これらの大型掘立柱建物群をどのように評価するかという点が重要となるが、以下



SB01



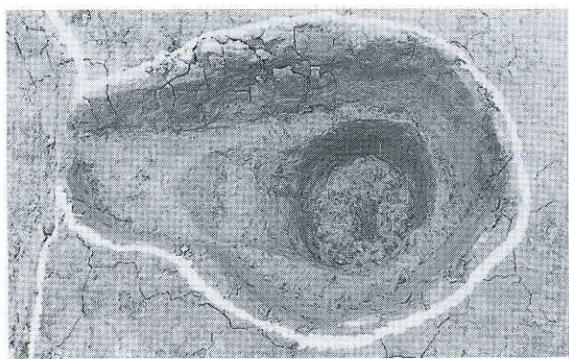
SB02

の点から下鉤や伊勢といった個別の集落の中において位置付けるだけでなく、野洲川流域全体の中でその機能・役割を把握することも必要となろう。

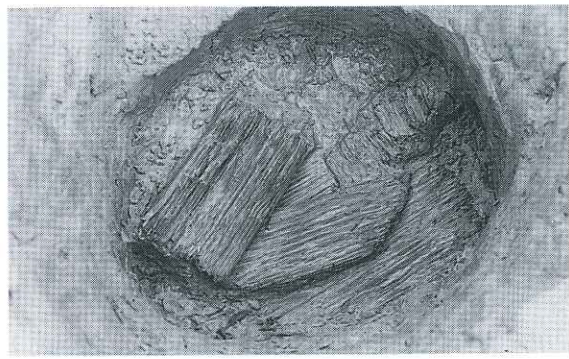
ところで、これらの大型掘立柱建物は一般に『祭殿』や『神殿』としてその機能・性格が評価されているが、今後は、規模構造の異なる他の事例との比較検討を通じて、その相互関係や機能性格にさらに迫っていく必要がある。

- ① 下鉤遺跡等における大型掘立柱建物の立地はいずれもその中心地をはずれた場所(北端、もしくは南端)にあり、同期の一般的な集落を近接して伴わない。
- ② 下鉤や伊勢遺跡に集中して見られる大型掘立柱建物の立地は、野洲川流域全体を視野に入れてみれば、旧左岸(栗太郡)と旧右岸(野洲郡)、両勢力のほぼ中間、その緩衝地帯に位置している。

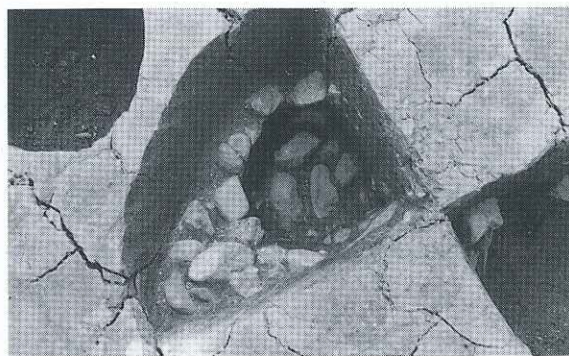
(大崎)



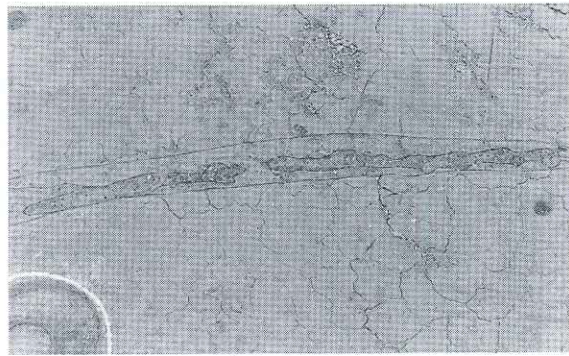
柱 穴



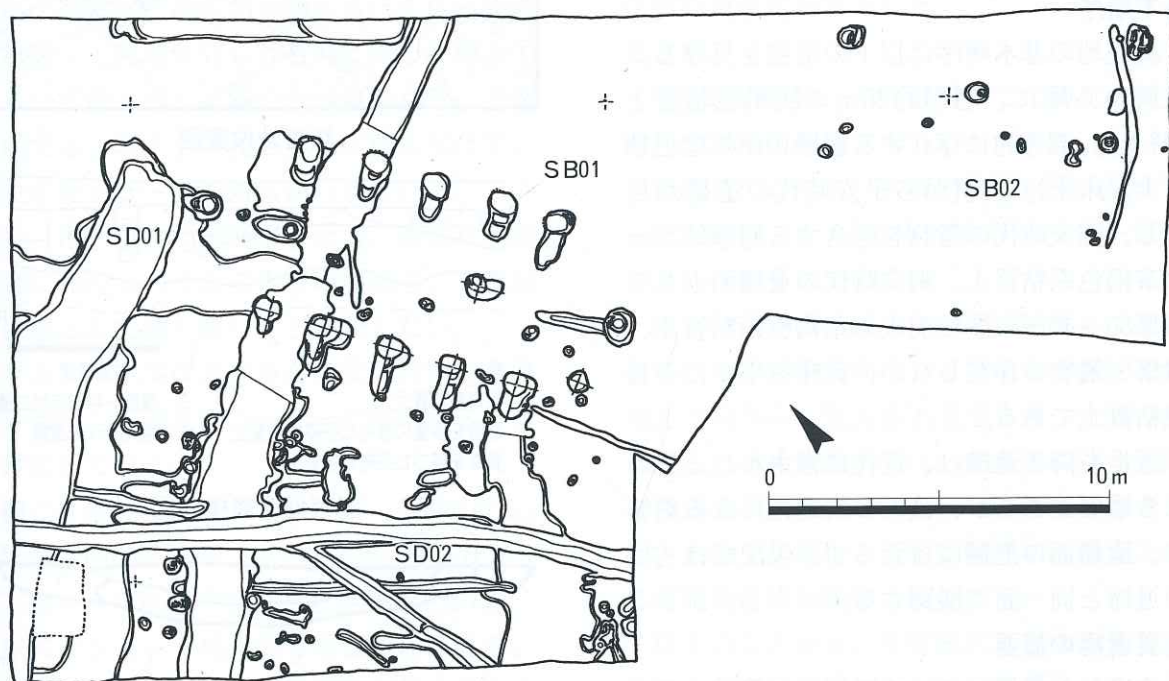
礎 板



石敷ピット



区画堀



調査地遺構図

⑪ 小 柿 遺 跡

調査地 栗東町大字小柿4丁目315-1、316-1
調査期間 1997年11月17日～1998年1月23日
調査面積 450㎡

はじめに

小柿遺跡は栗東町の北西部、葉山川流域の沖積平野に位置する縄文から近代に至る複合遺跡である。

過去の調査によると、集落は、弥生時代後期と平安・鎌倉時代に集中的に検出されており、古墳時代は古墳の存在が知られる。

古環境は、復元に至るデータに乏しいが、検出された旧河道は奈良時代までに埋没しており、平安時代以降は現地形に近い状況を呈したと思われる。

調査地は、古墳時代前期の方墳・円墳、後期の円墳と奈良・平安時代の掘立柱建物が検出された、1982年度調査地の西隣に位置し、古墳などの分布範囲の確認が課題とされた。

基本層序

調査地の基本層序は以下の堆積を見せる。上層から順に、層厚約25cmの灰褐色粘質土(耕土)。部分的に存在する層厚10cmの橙色粘質土(床土)。古墳から平安時代の遺構が展開し、縄文時代の遺物を包含する層厚約25cmの茶褐色系粘質土。縄文時代の遺構面となる層厚30～40cmの砂粒混入の茶褐色系粘質土、遺構・遺物の存在しない、黄味を帯びた茶褐色粘質土である。

近世を降る遺構は、近代に営まれたと思われる暗渠があるが、後世の耕地化による影響で、遺構面の把握には至らず、現況では古代の遺構と同一面で展開する。

主要遺構の概要

検出した遺構について時期毎に概述する。

縄文時代

竪穴住居(SB-1)：砂粒混入の茶褐色系粘質土(縄文時代遺構面)を切り込んで築

造されており、直径約3mの円形状を呈する。北側壁近くに炉が残存し、内部からBC3500～2000頃の所産と思われる深鉢が出土した。

竪穴住居は、遺構面と上層の面が土色・土質とも区別が付きにくく、上層掘削時に住居の存在に気付くのが遅れ、炉を囲む石の一部と住居の壁を削平する羽目となり、壁高6cmを残すのみとなった。

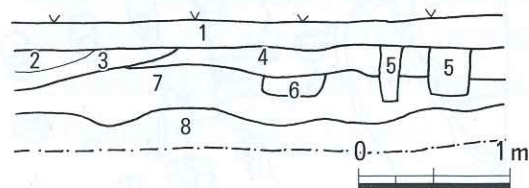
炉の形状は楕円形を呈し、埋土は黒褐色粘質土に少量の炭が混入している。

構造は、地山を緩やかにスロープを付けて5cm掘り込み、底部を平坦に掘削してテラスを設け、底部の中心に帯状の掘り込みを行う。配石はテラス上部で、スロープに沿って施している。配石は一部を取り除いてしまったが、検出時の状況を復元すると、3方向に顕著な配石が認められた。

帯状の掘り込みは、その壁(赤褐色)に沿って、胎土の粗い焼き物が張り付き、焼き物内

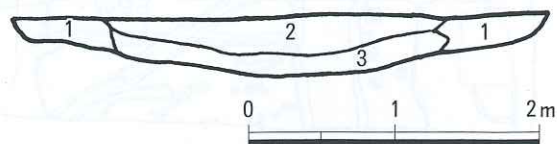


調査地位置図



- | | |
|-------------------|--------------|
| 1 耕土 | 2・3 古墳周濠 |
| 4 茶褐色粘質土 | 5 飛鳥～平安時代の遺構 |
| 7 砂粒を多量に含んだ茶褐色粘質土 | 6 縄文時代の遺構 |
| 8 黄味を帯びた茶褐色粘質土 | |

調査地土層模式図



- ① 黒褐色粘質土、② 茶褐色粘質土(上層)、
③ 灰褐色粘質土

SX-1 周濠堆積状況

側には深鉢が張り付く構造を呈する(写真4)。

粗い焼き物は、帯状の掘り込みの口から設置されており、掘り込みプランに伴う存在と思われる。ただ粗い焼き物は、掘り込みの底部までは達していない。焼き物内側の深鉢は、掘り込み底部では遺物を確認できなかった。

炉の形状は「土器埋設石組炉」に近いが、今後の検討が必要である。

縄文時代の遺構は、堅穴住居以外に顕著な遺構は認められなかったが、トレンチの壁面で掘り込みが一カ所認められた。時期を特定する遺物に恵まれなかったが、広範囲に当該期の遺構が検出できることを確認した。

古墳時代前期・飛鳥時代

古墳(SX-1)：全長23m、墳長17m、周濠は幅4m、深さ約0.4mを計り、周濠の平面形態から方墳と思われる。墳丘は認められない。

濠の埋土は大別すると①黒褐色粘質土、②黄褐色粘質土の混入した茶褐色粘質土(上層)、③灰褐色粘質土(下層)の3層に分かれる。

出土遺物は、埋土②・③からは7世紀代の須恵器・土師器が見られるのに対し、埋土①からは布留0式の土器のみが見られる。土層断面では、埋土①は濠の片側に残るだけで、中央を埋土②・③で断ち切られている。このため、出土遺物の時期も併せて、布留0式期以降に埋没しつつある古墳の周濠を、7世紀代に溝として掘り直したと解釈したい。

なお、埋土①における布留式併行期の土器の分布は、古墳北側コーナーに集中することを付記しておく。

掘立柱建物(SB-1)：2×2間を計る。

建物方向はN-50°-E Wである。柱掘り方・柱穴痕から7世紀中頃の須恵器が出土した。

柱穴はSX-1埋土②と重複関係にあり、埋土②の埋没直後に掘立柱建物が営まれたと考えられる。

奈良時代

掘立柱建物(SB-2)：1×1間の規模

で、建物方向は正南北方向に近い。柱痕からは、8世紀中頃の須恵器を確認した。SB-2と同一方向の建物は3棟確認できるが、いずれも時期など判別には至らなかった。

溝(SD-1)：調査地内の北側を横断し、幅1.5m、深さ0.2mを計る。埋土は層厚9cmの白灰色粘質土と層厚16cmの白灰色砂質土の2層からなる。上・下層とも7～8世紀代の須恵器・土師器が出土するが、8世紀代が大部分を占める。

溝は正南北方向の建物が機能した時期に存在したと思われる。

平安時代

掘立柱建物(SB-3)：2×4間以上の規模を計る。建物方向はN-35°-Eで、栗太郡主条里(N-30°~35°-E)とほぼ並行して建てられている。柱穴からは、9世紀代の須恵器などが出土した。

掘立柱建物(SB-4)：2×4間の規模を計る。建物方向はN-31°-Eで、栗太郡主条里にほぼ並行する。柱穴からは、9世紀中頃の須恵器が出土した。

まとめ

今回の調査は、小柿遺跡内で2例目の縄文時代の遺構を確認することができた。

古墳については、古墳の範囲が西へ広がることが確認でき、「小柿古墳群」の名を冠すべき分布を呈している。

掘立柱建物は、飛鳥から平安時代まで存在している。建物方向は、8世紀と9世紀で正南北方向から、栗太郡主条里方向へ大きく変化する。小柿遺跡内では、主条里に伴う地割りの調査事例は少ないが、1990年度の調査では、主条里に並行した平安時代頃と推定される道路状遺構が検出されている。

以上のことから、9世紀代に小柿遺跡周辺では、主条里を主体とした宅地開発がなされたことが考えられるが、条里の開発過程を含めて周辺の調査に期待したい。

(藤岡)

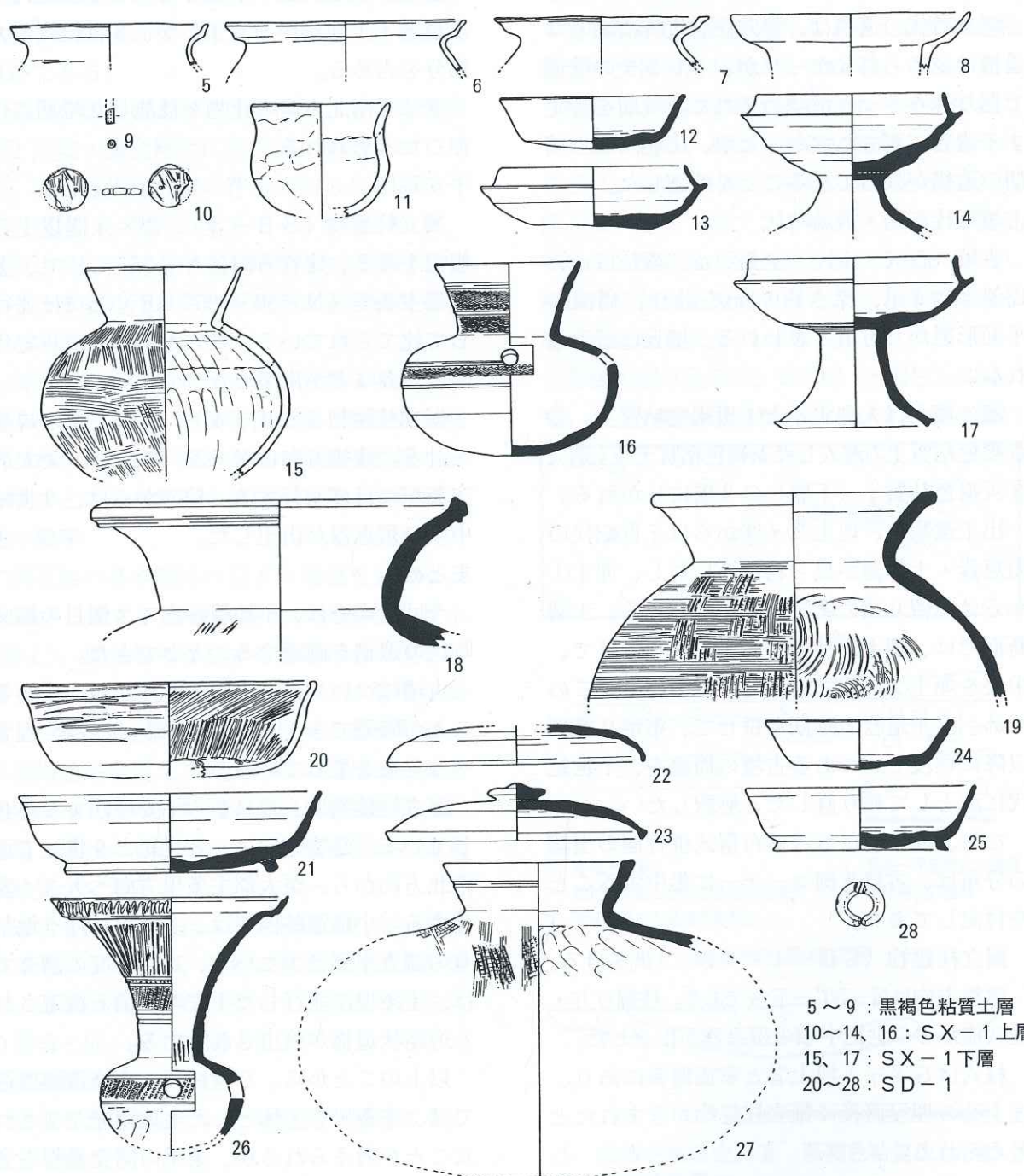
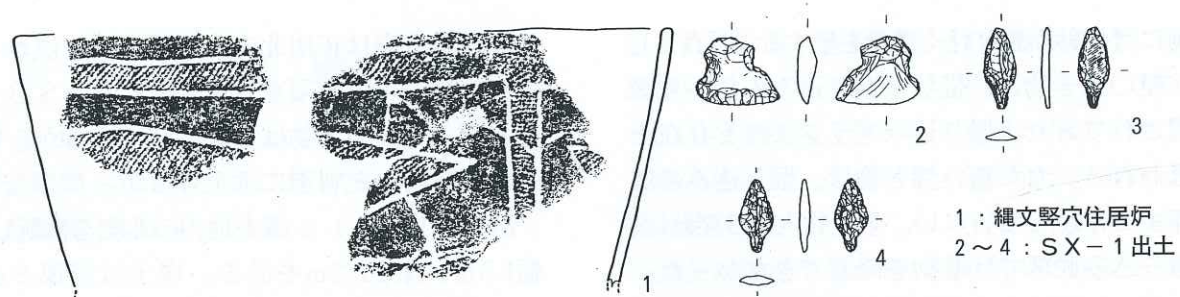


図4 出土遺物実測図 (S=1/4)

ただし9番はS=1/2



写真1 調査地全景

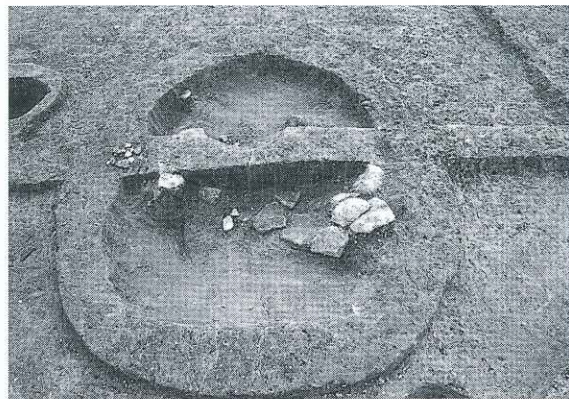


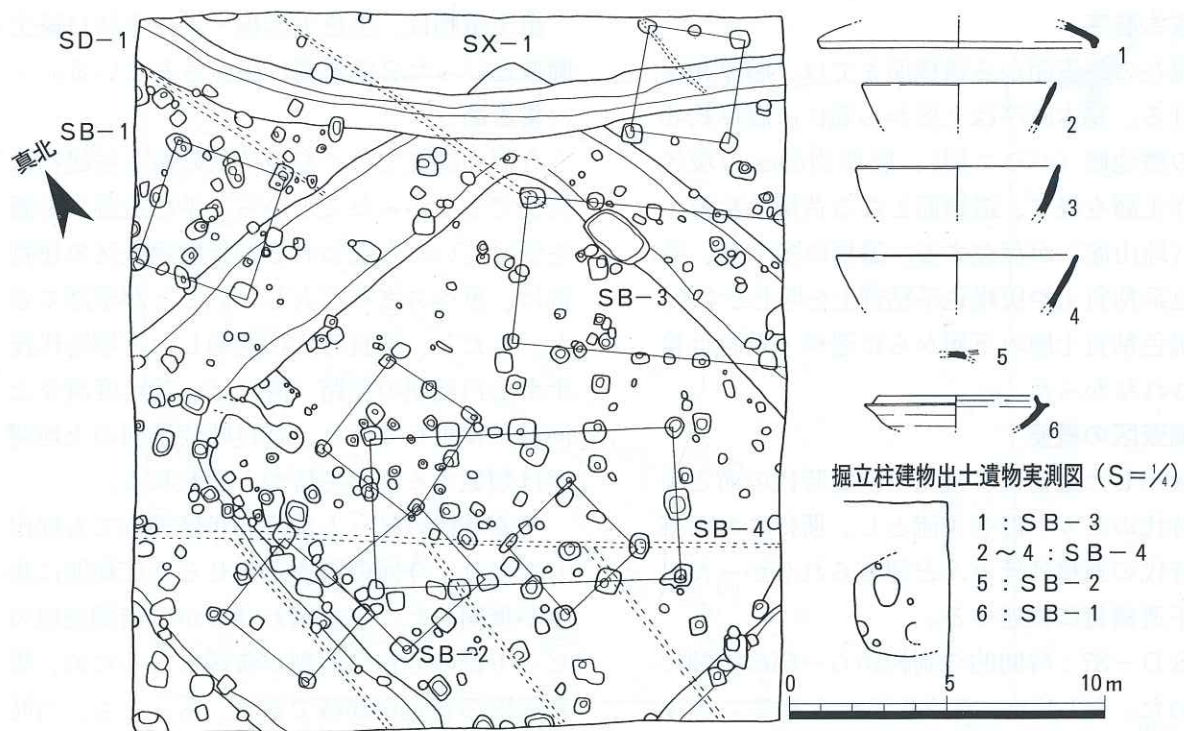
写真3 縄文竪穴住居炉配石状況



写真2 SB-2全景



写真4 縄文竪穴住居炉(配石を取り除いた状況)



調査地遺構図

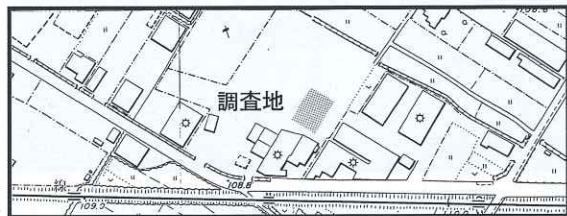
縄文時代竪穴住居実測図 (下層遺構)
調査区東隅部分にて検出

⑫ 高野遺跡

調査地 栗東町大字六地藏字高木1152

調査期間 1996年7月14日～8月22日

調査面積 380㎡



調査地位置図

はじめに

本調査区は高野遺跡の範囲の中でも南西端にあたり、手原遺跡に近接している。93年度の調査では、正南北方向に近い角度で建設された奈良時代の掘立柱建物や墨書土器が検出され、官衙とされる手原遺跡との類似性が指摘されている。

本調査区は、事務所建設工事に先立つ発掘調査で、93年度調査から東に20mの地点にあたる。

基本層序

現在の地表面から遺構面までは、層厚70cmを計る。基本層序は上層から順に、層厚約40cmの整地層（バラス層）、層厚約30cmの現代耕作土層を経て、遺構面となる黄褐色粘質土層（地山層）が存在する。遺構の多くは、茶褐色系粘質土や灰褐色系粘質土を埋土とする。黄褐色粘質土層の下層からは遺構・遺物は検出されなかった。

調査区の概要

検出した遺構は、飛鳥・白鳳時代の溝と平安時代のピット群を主流とし、期待された奈良時代の遺構はほとんど認められなかった。以下遺構毎に概述する。

SD-87：時間的な制約から一部の掘開に留めた。幅1.45m、深さ0.56mを計る。埋土は大別すると、灰色を帯びた茶褐色系粘質土（上層）・砂礫混入の茶褐色系粘質土（中層）・

礫混入の茶褐色系粘質土の3層からなる。

中・下層からは時期を確定する遺物は認められなかったが、上層からは、6世紀～7世紀代の須恵器が出土した。

SD-2：幅0.8～1.5m、深さは西側が30cm、東側が40cmで東から西に向かって傾斜している。埋土は灰色粘質土（上層）と黒灰色系粘質土に大別できる。時期を特定する遺物は認められなかったが、SD-2と重複関係にあるピットから11世紀の遺物を確認しており、それに先行する遺構と考えられる。

SK-1：4×4m、深さ10cmを計る不整形の土坑である。7世紀中～後半の須恵器が出土したが、遺物量は微量であり、その性格は特定し難い。

SK-28：1×2m、深さ30cmを計る。

埋土は灰色を帯びた茶褐色系粘質土（上層）と茶褐色系粘質土に大別できる。埋土からは7世紀中～8世紀初頭の須恵器が出土した。

ピット群：調査区の東側に集中的に分布する。ピットの大部分は、SD-1・2で認められなかった11世紀代の遺物を含有している。

出土遺物は、黒色土器碗・手の字状口縁土師皿といった日常雑器に限定されている。

まとめ

今回の調査では、奈良時代の掘立柱建物は検出できなかったことから、手原遺跡に影響を受けていたと思われる93年度調査区の建物群は、東へあまり拡大しないことが確認できた。ただし、奈良時代に廃絶した古墳時代後半から白鳳期の流路（溝）は、93年度調査と同様に検出しており、奈良時代以前の土地開発は類似する性格を持つと思われる。

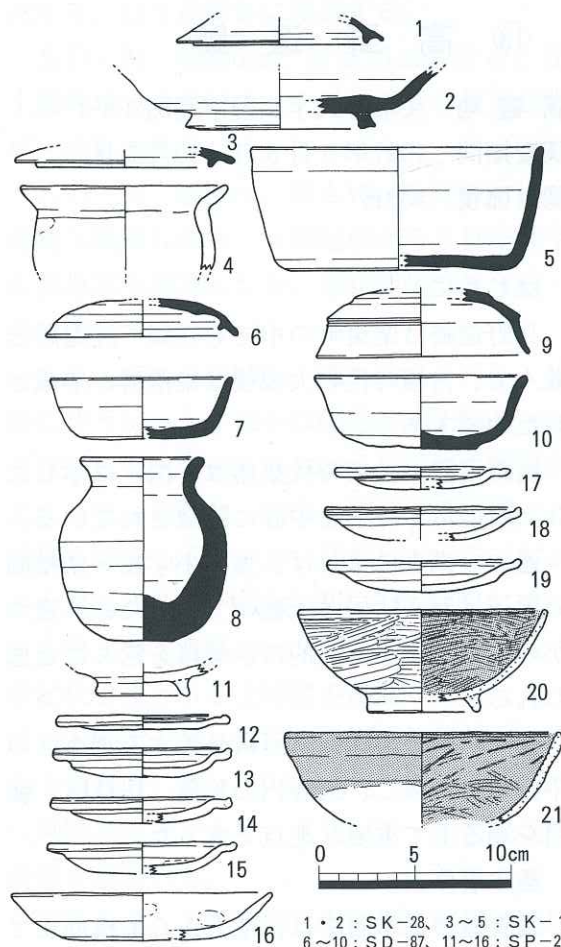
平安時代のピット群は93年度調査でも検出しており、今回の調査と併せると広範囲に集落が展開したことを窺わせるが、当調査地のピット群の分布は北側が希薄となるため、集落範囲の特定が期待できる。もっとも、当時の景観を復元するには、データは不足しており、今後の調査に期待したい。（藤岡）



調査地全景

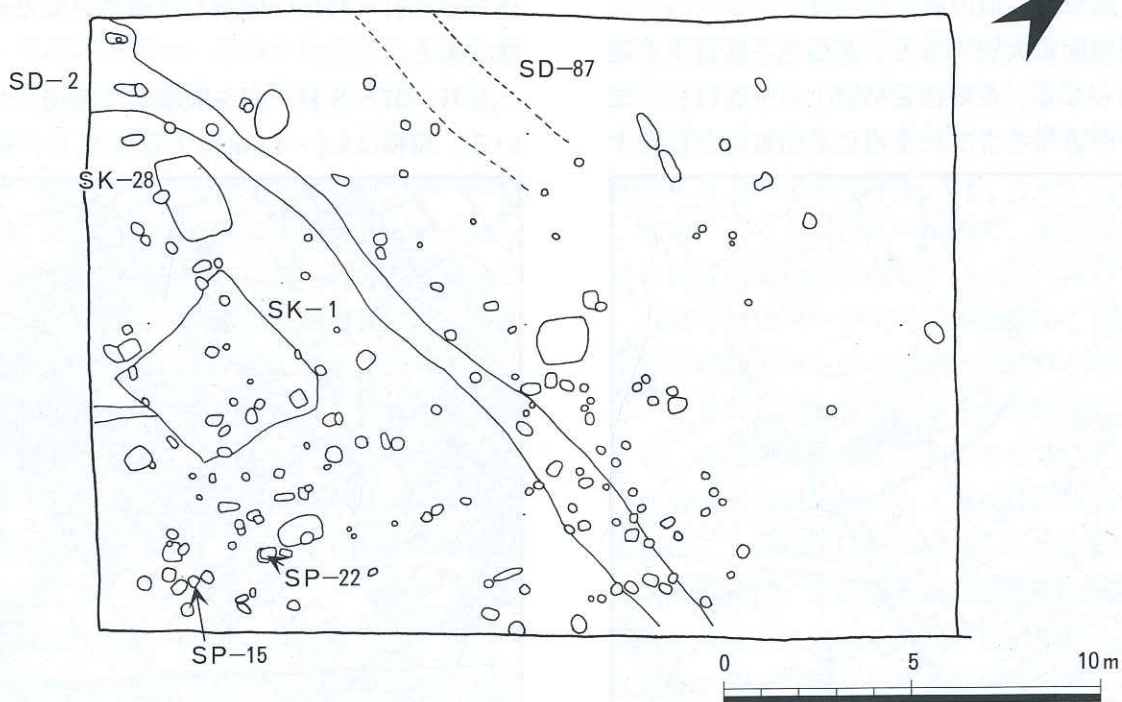


調査地南側全景



出土遺物実測図

1・2 : SK-28、3~5 : SK-1
6~10 : SD-87、11~16 : SP-22
17~21 : SP-15



調査地遺構図

⑬ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野字高関203-1

調査期間 1997年9月8日～10月31日

調査面積 450㎡

はじめに

高野遺跡は栗東町の中でも岩畑・辻遺跡と並んで、古墳時代の大規模な集落群が形成された地域である。

高野遺跡の古墳時代集落は、図1に示した3カ所のポイントを中心に確認されている。

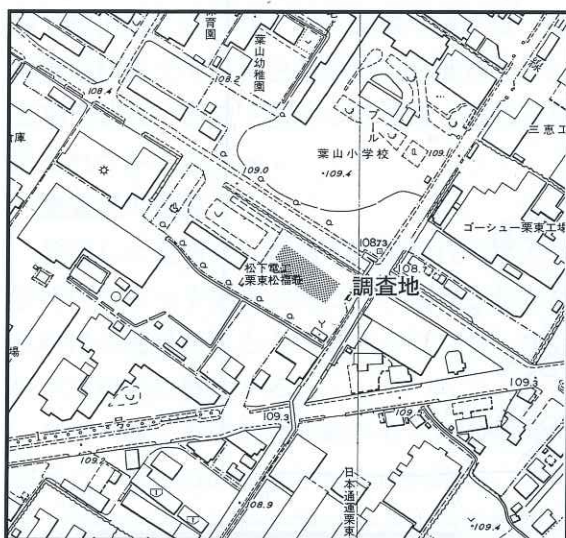
過去の調査によれば、葉山小学校・幼稚園の周辺は竪穴住居は未確認であるため、幾つかのグループが散在的に、集落を営んだと思われる。

今回の調査地は3カ所に分散する調査区の間中点に位置し、遺跡内の集落(居住区)範囲を知る上で重要な地点であった。

基本層序

調査地の基本層序は、地表から遺構面までの層厚130cmの間に造成土(バラス)・黄褐色粘土・黄褐色粘土が混入した灰色粘土を経て、遺構面(地山層)に至る。

遺構面は大別すると、茶褐色系粘質土と礫層からなる。茶褐色系粘質土の下層は、一部でやや青味を帯びた茶褐色系粘質土が存在す



調査地位置図

るため、遺構面は河川堆積土上に形成されたと思われる。

古墳時代前～中期の遺構

当該期の遺構は、竪穴住居4棟と土壇を確認した。

SH-2: 5.5×5.5mの規模で、残存壁高は25cmを計る。床面には4つの支柱穴があり、地床炉はほぼ中央に赤く焼けた焼土面が2カ所で見られる。南東縁辺部には1×1.2mの土坑があり、土坑のテラス中央からは、深さ0.6mの楕円形の掘り込みが存在する。

土坑西側には、幅6cm、床面からの深さ2cm、長さ120cmの「しきり溝」が存在し、壁溝に結合している。埋土は壁溝と同一であるが、両者の底は3cmの比高差があり、しきり溝側が高くなっている。

壁溝は、幅25cm、床面からの深さ6cmを計り、壁沿いを全周する。出入り口は特定できなかった。

出土遺物は、3世紀後半～4世紀前半を中心とした、高杯・甕などを確認した。しかし、図1のように、やや時期が遡る遺物が存在する。この遺物は土坑内から確認しており、後述するSH-42に、先行して構築された可能性がある。

SH-57: SH-42を破壊して築造されている。規模は4.4×4.5mの方形を呈し、残存

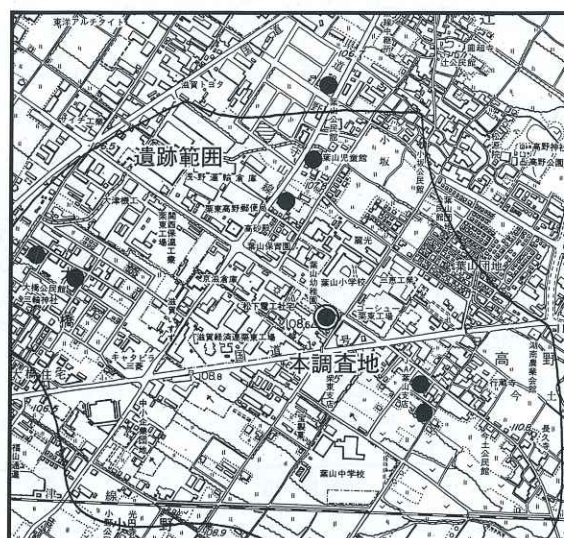


図1 高野遺跡竪穴住居検出調査区位置図

壁高は25cmを計る。床面には4つの支柱穴が残る。西側の柱穴付近には、地床炉と思われる赤褐色の焼土面を確認した。

土坑は南東縁辺部で見られ、平面規模80×90cm、深さ60cmを計る。西側には「しきり溝」があり、床面からの深さ6cm、長さ50cmを計る。壁溝と直結し、埋土も同一であるが、両溝の溝底は4cmの比高差があり、壁溝側が高い。

出土遺物は5世紀代を中心とした、壺・甕・高杯を確認した。

SH-42：重複関係からSH-2に先行する。検出規模は3.5m以上×5mであるが、SH-2による破壊で正確な規模は詳らかでない。地床炉も不明である。南東縁辺部には平面規模70×90cm以上、床面からの深さ25cmの土坑が見られる。壁溝は幅20cm、床面からの深さ4cmで、住居東側で検出した。

出土遺物は、3世紀後半～4世紀前半代を中心とし、甕・高杯などを確認した。

SH-10：4.4×5m以上の規模で、残存壁高は15cmを計る。

床面には4つの支柱穴が残る。地床炉は確認できなかった。土坑は南東縁辺部にあり、平面規模70×70cm、床面からの深さ25cmを計る。壁溝は幅20cm、床面からの深さ8cmを計り、壁沿いに廻るが、土坑の北東側（北側）では確認できなかった。

SK-11：重複関係から、SH-4に先行する。その形状から竪穴住居と考えていたが、方形状の掘り込み内に、浅い溝を持つ遺構となった。古墳時代の遺物を確認したが、詳細な時期、性格等は不明である。

古墳時代前～中期の遺構は、竪穴住居に先行する土坑と竪穴住居の二次期にわかれる。

このうち、竪穴住居は出土遺物を勘案するとSH-57・10とSH-2・42の二段階の構築時期を設定できる。

古墳時代後期～平安時代の遺物

古墳時代中期に後出する遺構の中心は、平安時代であり、掘立柱建物・ピットなどが存

在する。以下遺構毎に概述する。

SD-31：幅130cm、深さ15cmを計る。出土遺物は、6世紀中～7世紀後半の須恵器の杯・高杯である。

SD-32：幅50cm、深さ10cmを計る。出土遺物は微量ながら、5世紀中から6世紀前半の須恵器を確認したが、重複関係ではSD-31に後出する。

SP-17：直径25cm、深さ18cmを計る。建物に伴うピットか否かは確認できなかったが、9世紀代の土師皿と共に、6枚重ねの銅銭が出土した。銅銭は、銘文の判読が不可能で、時期を特定しえないが、緡銭（さしぜに）によると思われる紐の痕跡が認められる（図4-2）。

SP-41：直径40cm、深さ23cmを計る。9世紀代と思われる土師器を確認した。

SB-1：1×4間以上の掘立柱建物で、建物方向はN-58°-Wである。出土遺物には灰釉陶器などがあり、9世紀末～10世紀代の所産と思われる。

SB-2：1×3間以上の掘立柱建物で建物方向はN-55°-Wである。出土遺物には、黒色土器碗・手の字口縁状土師皿があり、10世紀代の所産と思われる。

SB-3：3×4間の掘立柱建物で、建物方向はN-9°-Wである。出土遺物には、土師質の壺があり、6世紀末～8世紀前半代に収まるものと思われる。

SA-1：3間以上の柵列で、6世紀代と思われる須恵器が出土した。

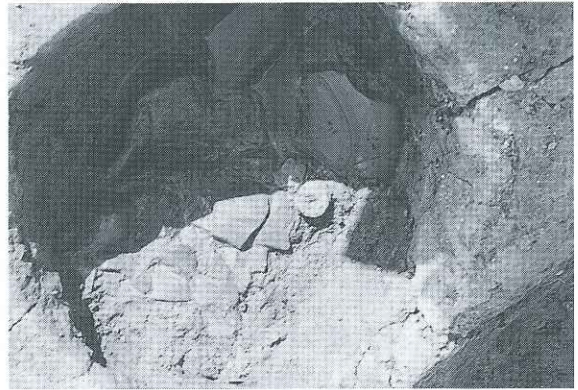
古墳時代後期～平安時代の遺構を、掘立柱建物の建物方向を中心にまとめれば、磁北に近い、SB-3とSA-1と条里地割に近いSB-1・2に分けることができる。

前者は6世紀後半から8世紀代に収まり、後者は、9世紀代以降に成立したと思われる。

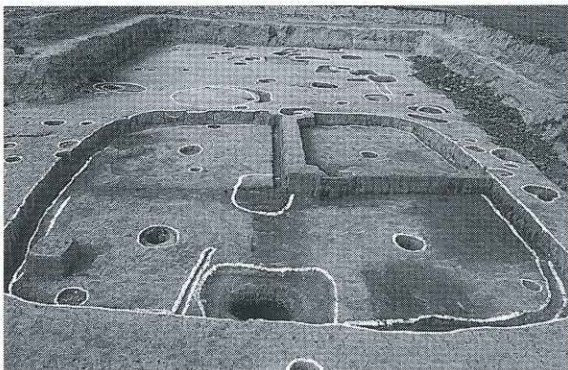
栗東町では、条里地割施行の時期を明確に判断する資料に欠けるが、9世紀頃から掘立柱建物が条里方向を呈する傾向にあり、当遺跡もその枠組に収まるものとなろう。（藤岡）



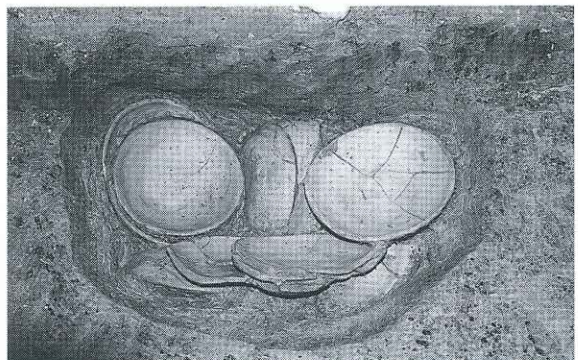
調査地全景



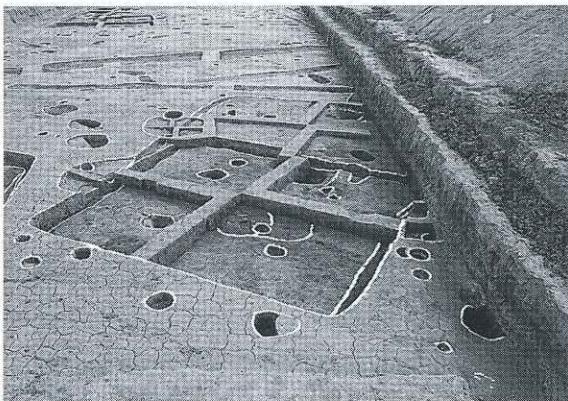
SP-17土器出土状況



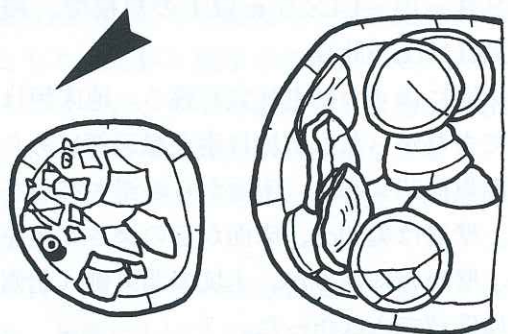
SH-2全景



SP-91土器出土状況



SH-57・42全景



SP-17(左)・SP-91(右)
土器出土状況実測図 (1/10)

	法 量		調 整			胎 土	色 調	備 考
	口 径 (cm)	器 高 (cm)	外 面	内 面	底 部 外 面			
1	13.6	3.0	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
2	13.4	3.0	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
3	13.4	3.0	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
4	13.4	2.8	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
5	13.6	2.8	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
6	13.6	3.0	回転ナデ	回転ナデ	へら切り後ナデ	砂粒少量含有	橙色	図4-3
7	13.0	2.8	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
8	13.4	2.8	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
9	13.4	2.7	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
10	13.2	2.8	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
11	13.2	2.8	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
12	13.6	3.0	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
13	13.6	2.9	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	図4-4
14	13.4	3.0	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
15	13.4	3.1	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	図4-5
16	13.8	2.7	剥離	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
17	13.0	2.5	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
18	12.8	3.0	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
19	13.0	2.9	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	図4-6
20	14.0	2.3	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	
21	15.4	2.4	回転ナデ	回転ナデ	へら切り未調整	砂粒少量含有	橙色	

SP-91出土遺物(回転台土師器)観察表

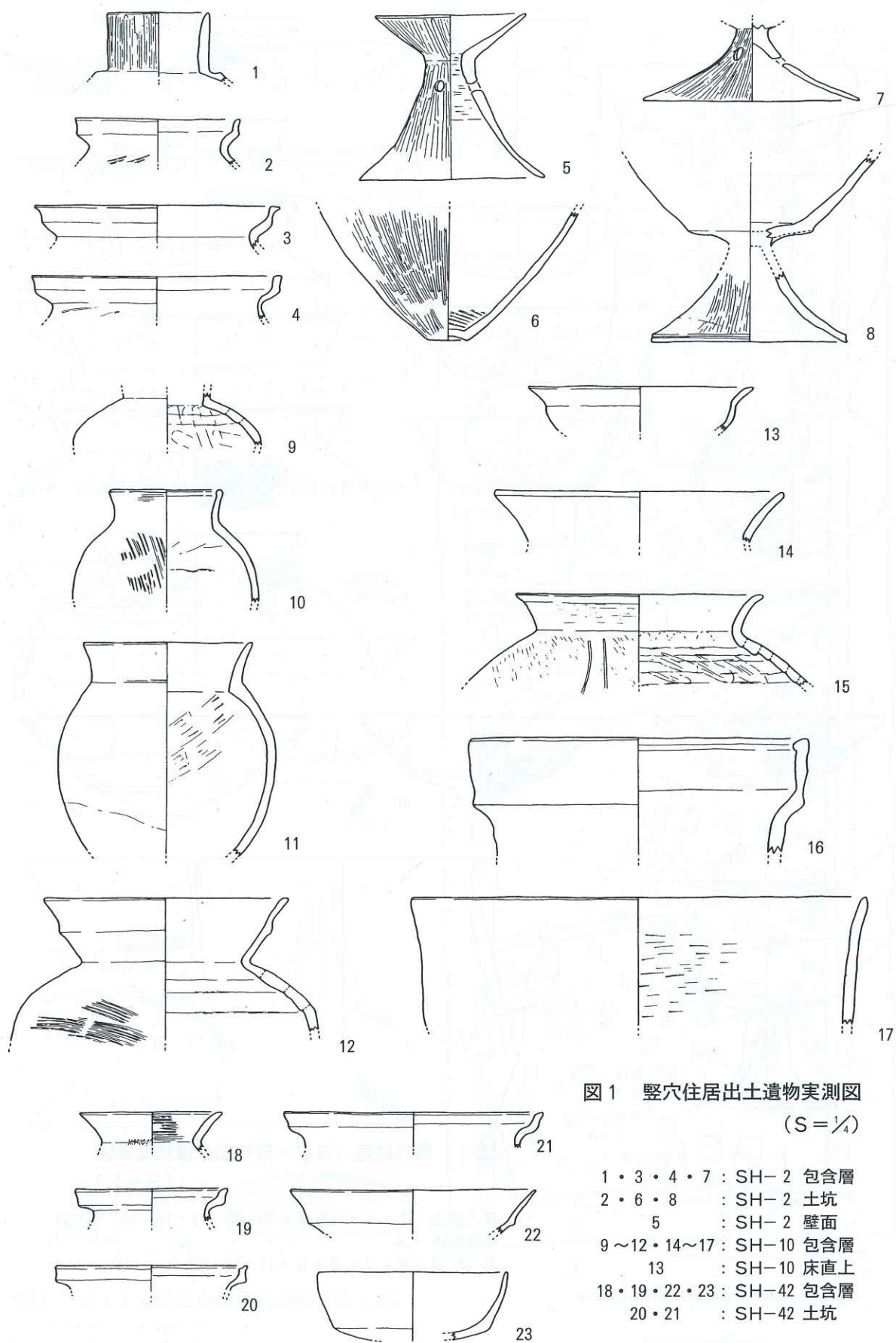


图1 豎穴住居出土遺物実測図
($S = \frac{1}{4}$)

- 1・3・4・7 : SH-2 包含層
 2・6・8 : SH-2 土坑
 5 : SH-2 壁面
 9~12・14~17 : SH-10 包含層
 13 : SH-10 床直上
 18・19・22・23 : SH-42 包含層
 20・21 : SH-42 土坑

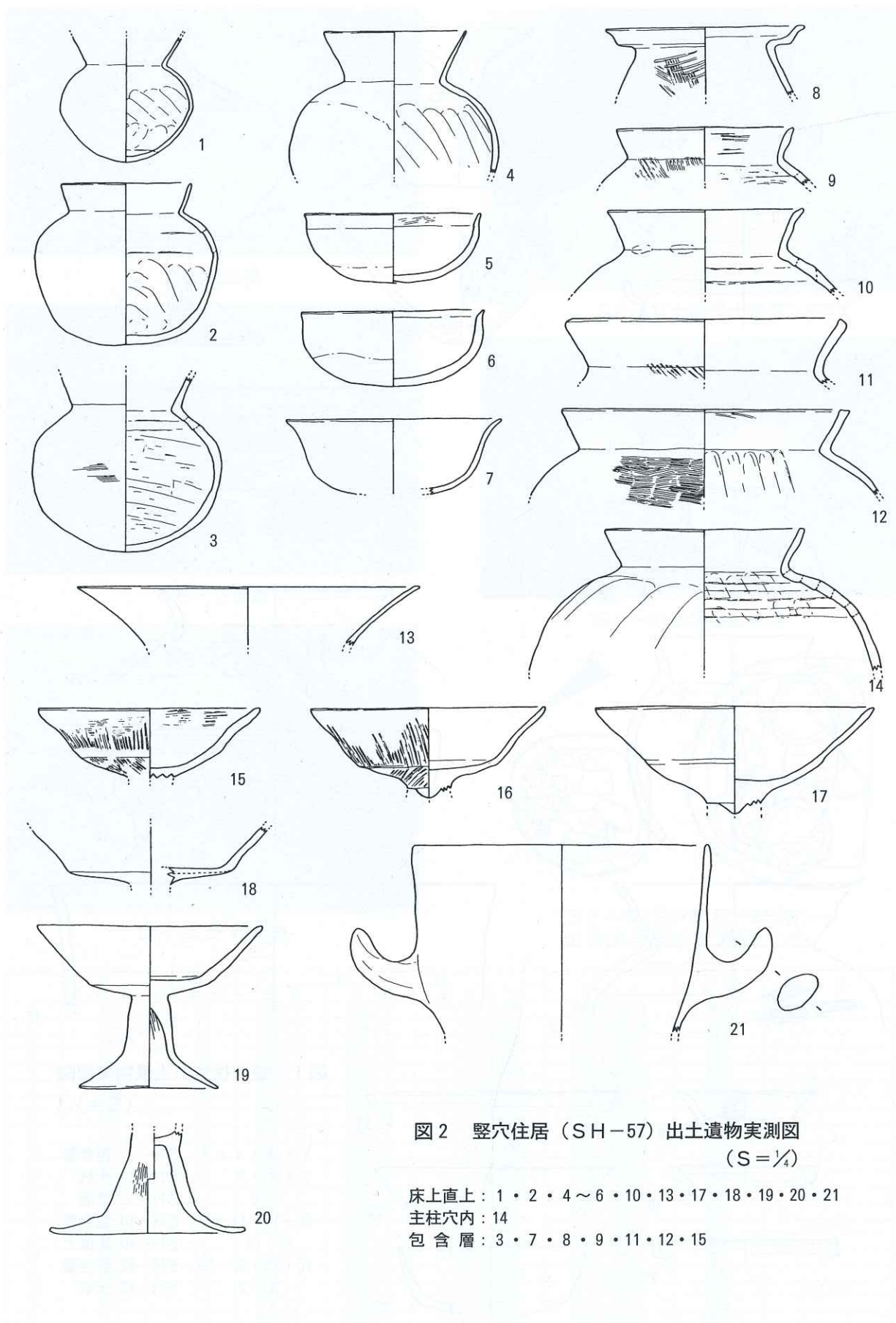


图2 竖穴住居 (SH-57) 出土遺物実測図
(S = 1/4)

床上直上: 1・2・4・5・6・10・13・17・18・19・20・21
主柱穴内: 14
包含層: 3・7・8・9・11・12・15

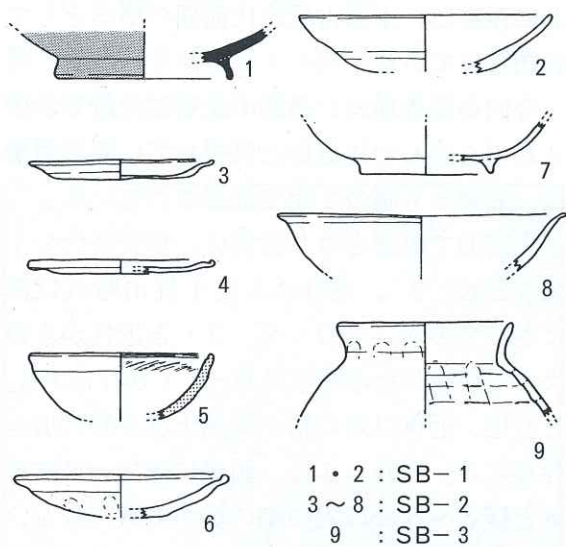


図3 掘立柱建物出土遺物実測図 (S=1/4)

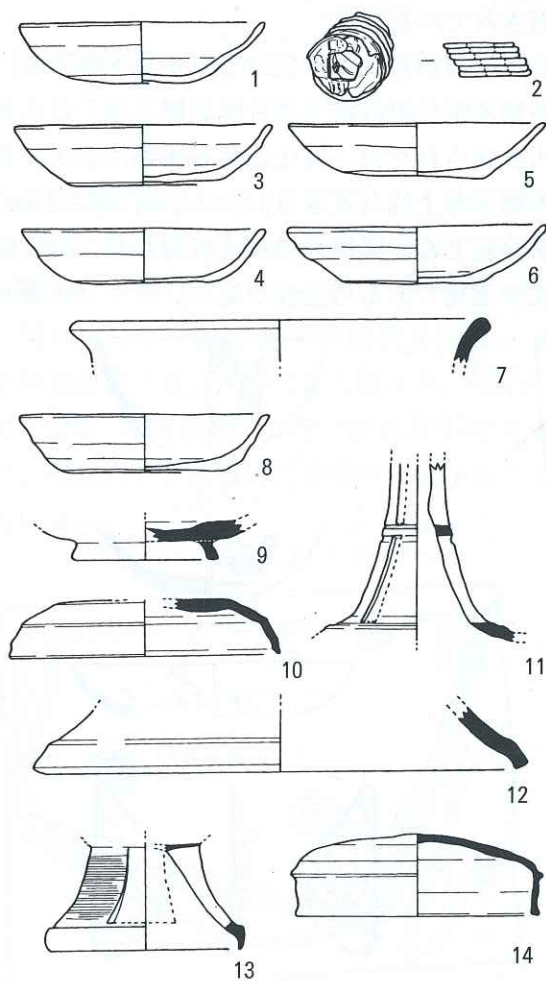
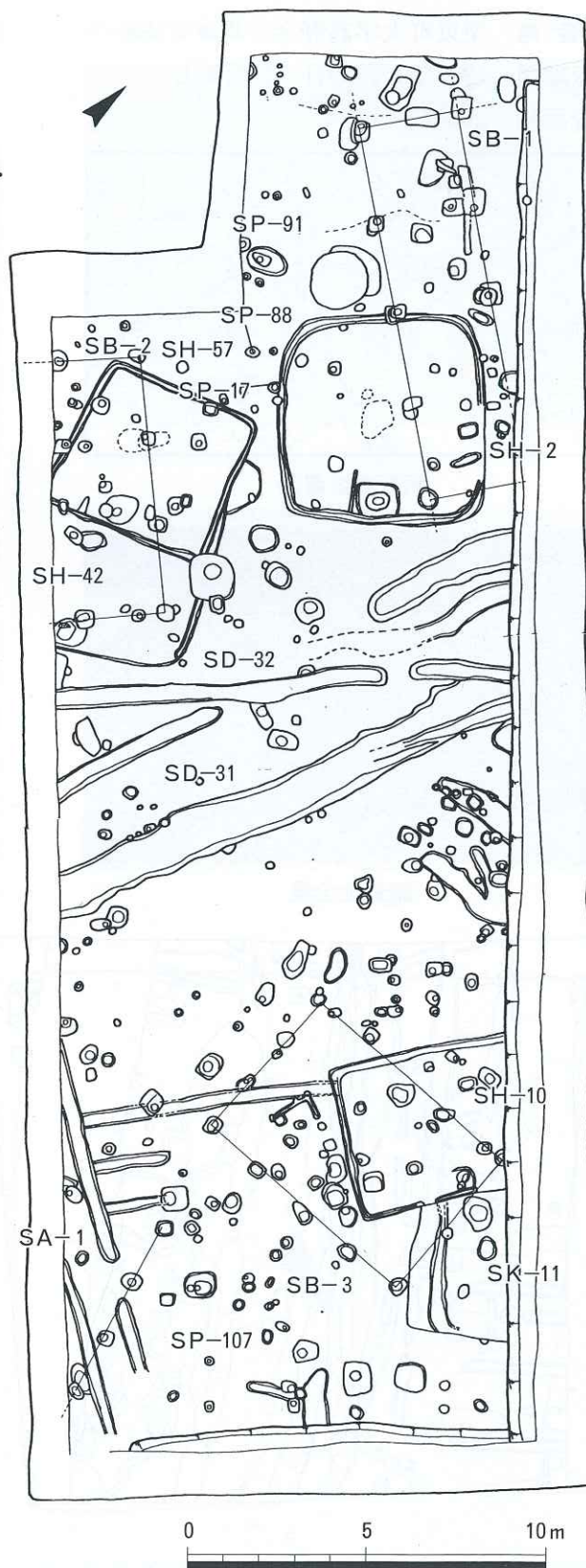


図4 ピット・溝出土遺物実測図 (S=1/4)



調査地遺構図

⑭ 高野遺跡

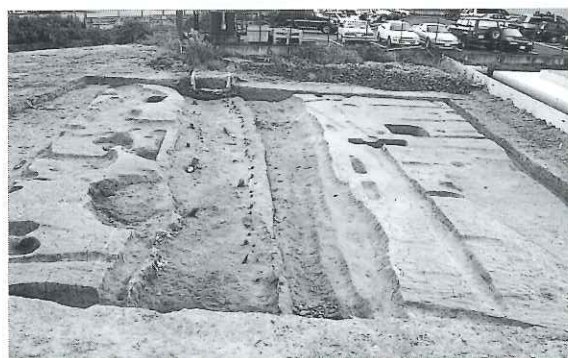
調査地 栗東町大字高野字サルガウ598

調査期間 1997年9月29日～10月31日

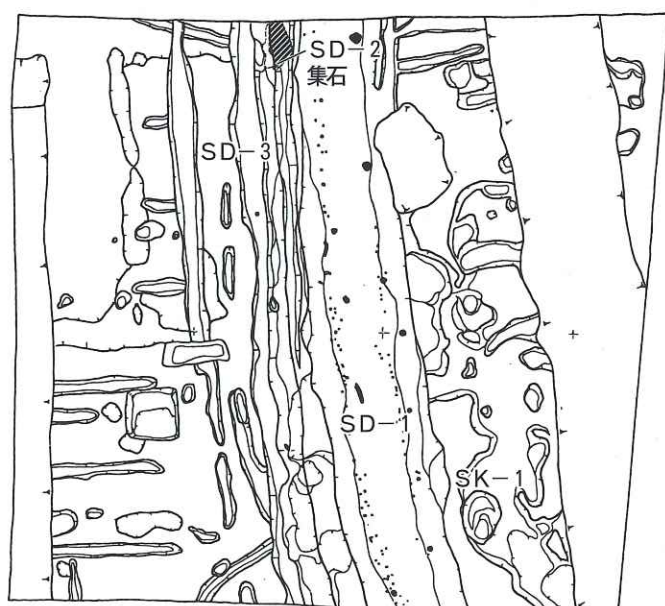
調査面積 263㎡



調査地位置図



調査地全景



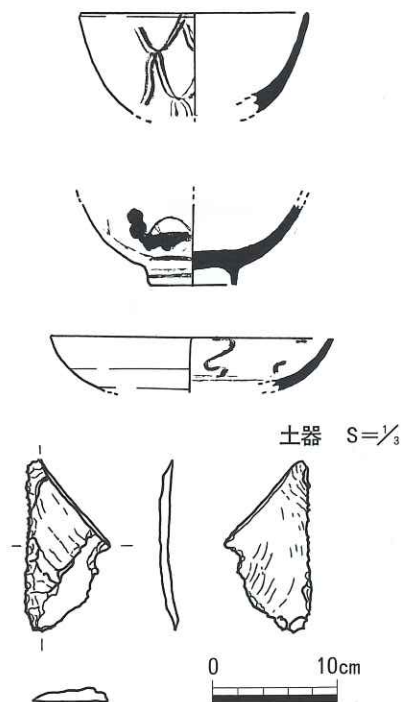
調査区遺構図 (上層面)

高野遺跡は、野洲川左岸の自然堤防微高地上に存在し、主に古墳時代前期の集落として周知されている。

今回の調査地は、遺跡の北端に位置し、中ノ井川を挟んで辻遺跡と隣接している。遺構は、上層と下層の2面で確認されている。

上層面で確認された遺構は、平安時代の土坑 (SK-1)、室町から安土桃山時代以降にかけての溝 (SD-2, 3) と近代から現代まで存在した水路 (SD-1) が存在する。この他、近世以降の粘土採掘土坑や耕作痕が存在する。SD-1 は、両側に径10cmほどの坑と径3～5cmほどの細い坑が多数存在し、下層の砂層からは多数の陶磁器をはじめ、石器や木器も出土している。またSD-2の北端 (調査壁寄り) で約5～10cmほどの石が集石されていた。

上層面から約1～1.2m下げた下層面では、時期不明の噴砂跡 (調査区北側半分) が5ヶ所確認された他、炭化物がわずかに混入する不整形な土坑 (大きさ2.6×1.2m、深さ20cm) が存在した。隣接地の調査成果から、縄文時代の遺構である可能性が高い。(近藤)



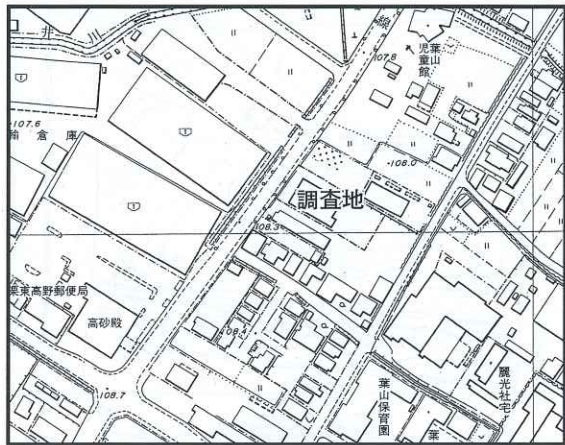
SD-1 出土 伊万里・石器

⑮ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野字サルガウ598

調査期間 1997年10月24日～11月7日

調査面積 120m²

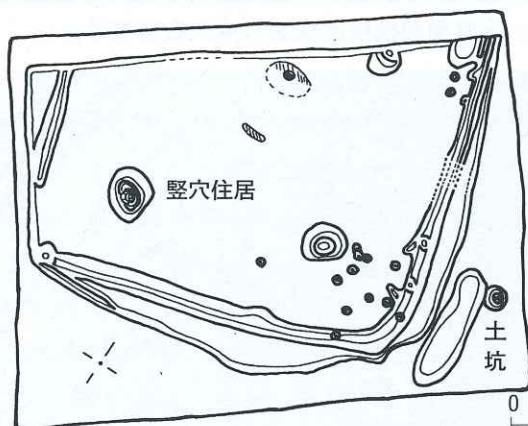


調査地位置図

高野遺跡は栗東を代表する古墳時代集落遺跡として広く周知され、竪穴住居や掘立柱建物その他、周溝墓の発見も知られている。

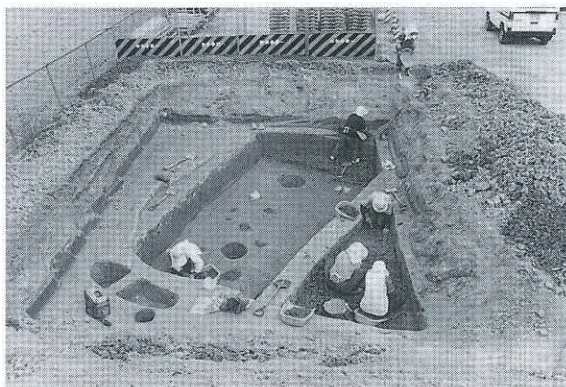
今回の調査でもやはり竪穴住居1棟が確認され、集落遺跡としての密度の高さを改めて認識させるものとなった。

竪穴住居は一辺5.8mの方形状を呈し、4支柱構造をとる。床面は堅く締まり、壁沿いには壁溝（幅0.3m）、ほぼ中央には炉床をもつ。埋土内より古墳時代前期の土器が出土している。

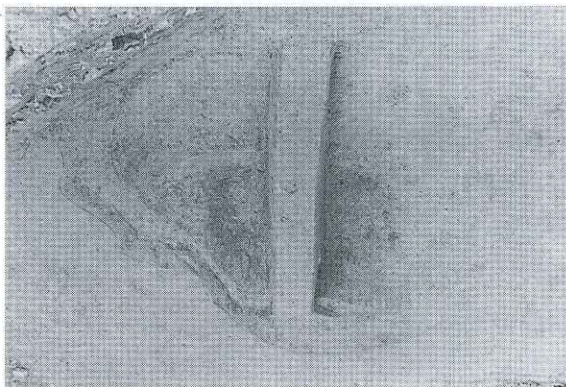


調査地遺構図

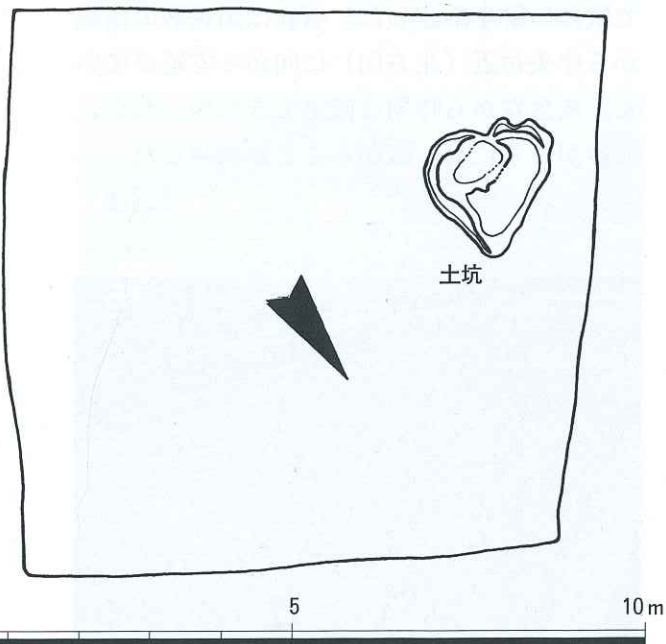
その他の遺構には、不整楕円形や長楕円形を呈する土坑がある。いずれも古墳時代前期のものであろう。（大崎）



竪穴住居



土坑

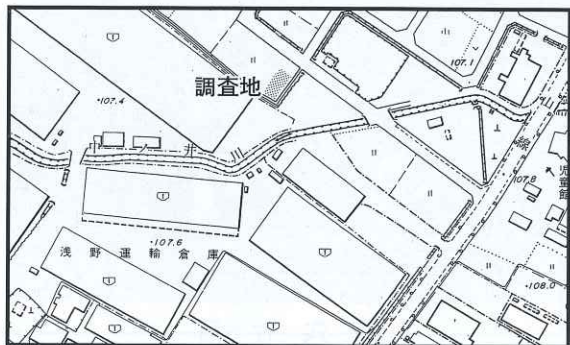


⑬ 高野遺跡

調査地 栗東町大字辻616

調査期間 1997年12月2日～12月16日

調査面積 約200㎡



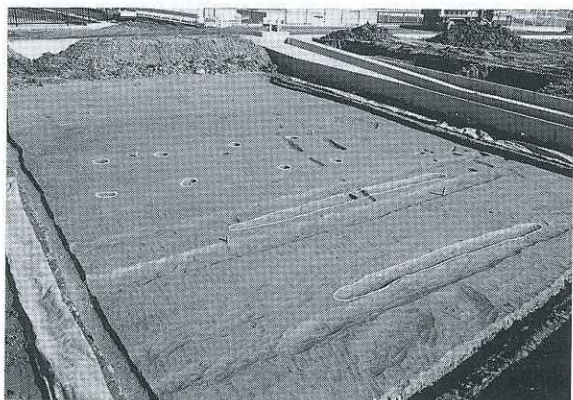
調査地位置図

本調査地は、1993～1996年度にかけて行われた辻・小坂西部土地区画整理事業に伴う調査区の隣接地で、高野遺跡の北端にあたる。

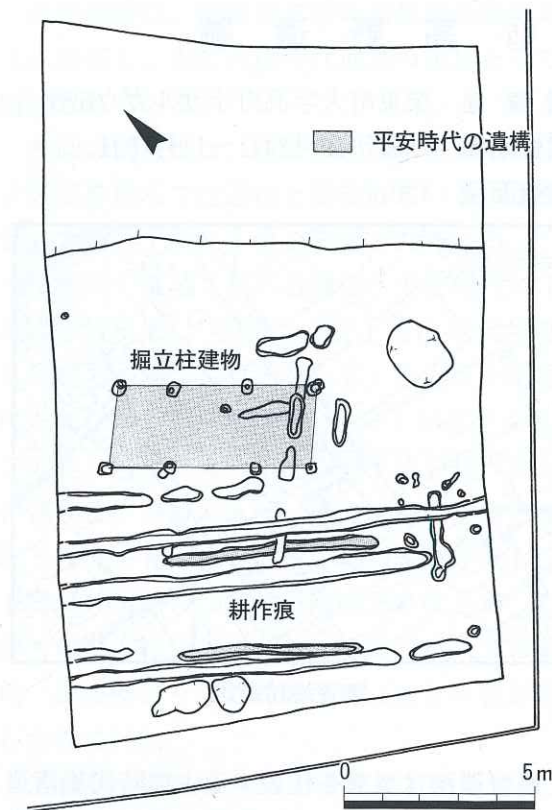
今回の調査での大きな成果は、以前の調査で建物がまったく未確認であった地域に平安時代の建物が確認されたことである。建物の規模は、3間(5.4m)×2間(2.2m)である。周囲の状況から、農作業等の倉庫に利用されていた建物の可能性を考えておきたい。

また、上層面から約70～100cm下げた部分で噴砂の跡を確認した。噴砂は調査区の南端から中央付近(北方向)に向かって延びている。残念ながら時期は確定できなかったが、噴砂がさらに南へ広がることが判明した。

(近藤)



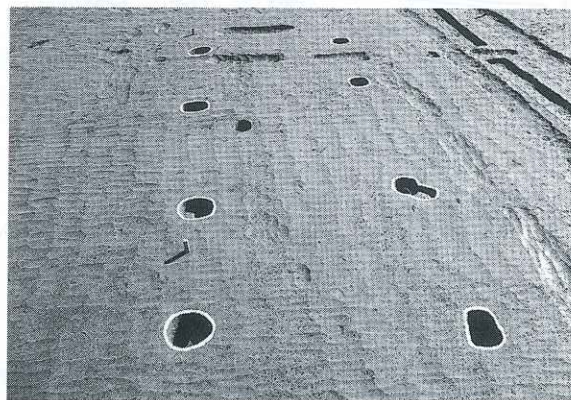
調査地全景



調査地遺構図



下層面遺構検出状況(中央右端噴砂)



掘立柱建物(西から東方向)

⑪ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻・高野地先

調査期間 1997年11月17日～1998年3月31日

調査面積 約1106㎡



調査地位置図

辻・小坂西部土地区画整理地区の保留地造成に伴う第1次調査で、縄文時代後期から近世以降にいたる遺構が確認された。

調査区は道路をはさんで南側をトレンチ1 (T1)、北側をトレンチ2 (T2)とした。以下、上層と下層に分けて主な遺構・遺物について概述する。

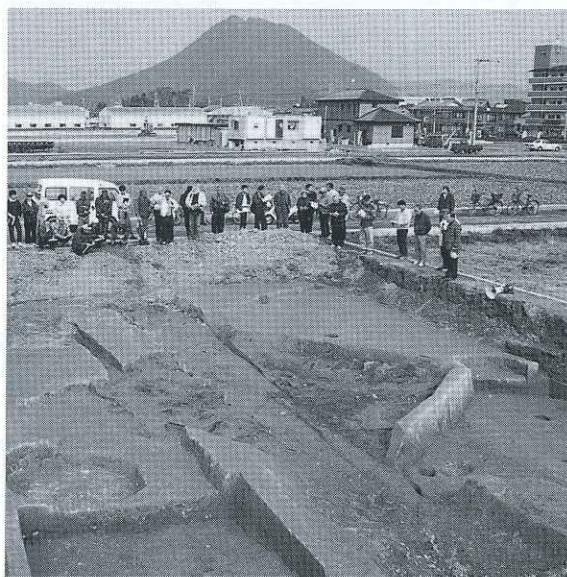
《上層遺構》上層面の遺構は、現地表面から約1m下の地点に存在する。

T1 古墳時代前期の竪穴住居 (SH) 2棟、柵列、溝、奈良～平安時代の掘立柱建物 (SB) 3棟、近世以降の井戸、耕作痕、粘土採掘土坑等が確認されている。

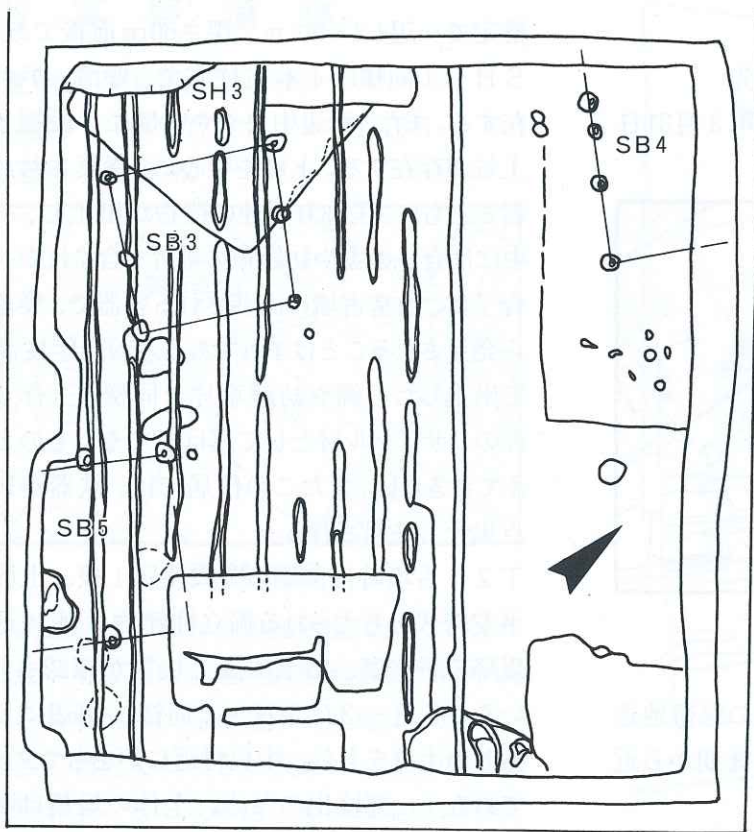
SH-1は、一辺5.6×5.8m、深さ検出面から60cm前後である。周囲には壁溝が巡り、ほぼ中央に炉が存在する。支柱穴は4本である。注目すべきことは、住居が焼失していたことと、住居の東半分を中心に玉作り関連遺物が多数出土したことである。東辺中央壁から約90cm離れた所には、工作用のピットが存在し、白泥状沈殿物が確認されている。管玉の未製品は、片割り、側面打裂、磨き、穿孔というようにほぼ一通りの製作工程を知る遺物が出土 (同時に玉砥石も出土)した。SH-2は、北側がSH-

1に切られ、全体を知ることはむずかしいが、推定で一辺4.3×5.4m、深さ60cm前後である。SH-1同様に4本支柱穴で、壁溝、炉が存在する。また、南辺中央やや東側に2段掘りの土坑が存在する。上層を中心に、廃棄された土器とともに、玉作り関連の遺物が出土し、その中には合子の蓋や紡錘車の破片も含まれていた。合子は、通常古墳に副葬される容器で、集落から発見されることはまれである。1995年度調査で出土した石釧や紡錘車片と同様、玉作り製作のリサイクル材として運ばれてきたものと考えておきたい。またこの住居では、鉄器が10数点出土し注目される。

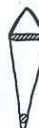
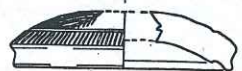
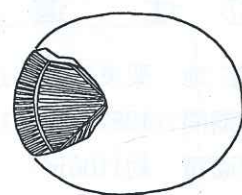
T2 古墳時代前期の竪穴住居1棟、土坑、平安時代と考えられる掘立柱建物3棟、近世以降の耕作痕、粘土採掘土坑等が確認されている。SH-3はSH-2同様、南辺に2段掘りの土坑をもち、中央付近に炉をもつタイプである。一部検出のため、全体の規模は明確ではないが、南辺の長さは6.3mである。SB-3、4はほぼ同一方向に建てられ、規格性をもっていたことが考えられる。SB-3は3×1間の建物で、SB-4は、以前の調査成果から7間×1間の東西方向に長い建物ということが判明している。柱穴からは須恵器の瓶子が出土している。



現地説明会のようす (1998. 2. 29)

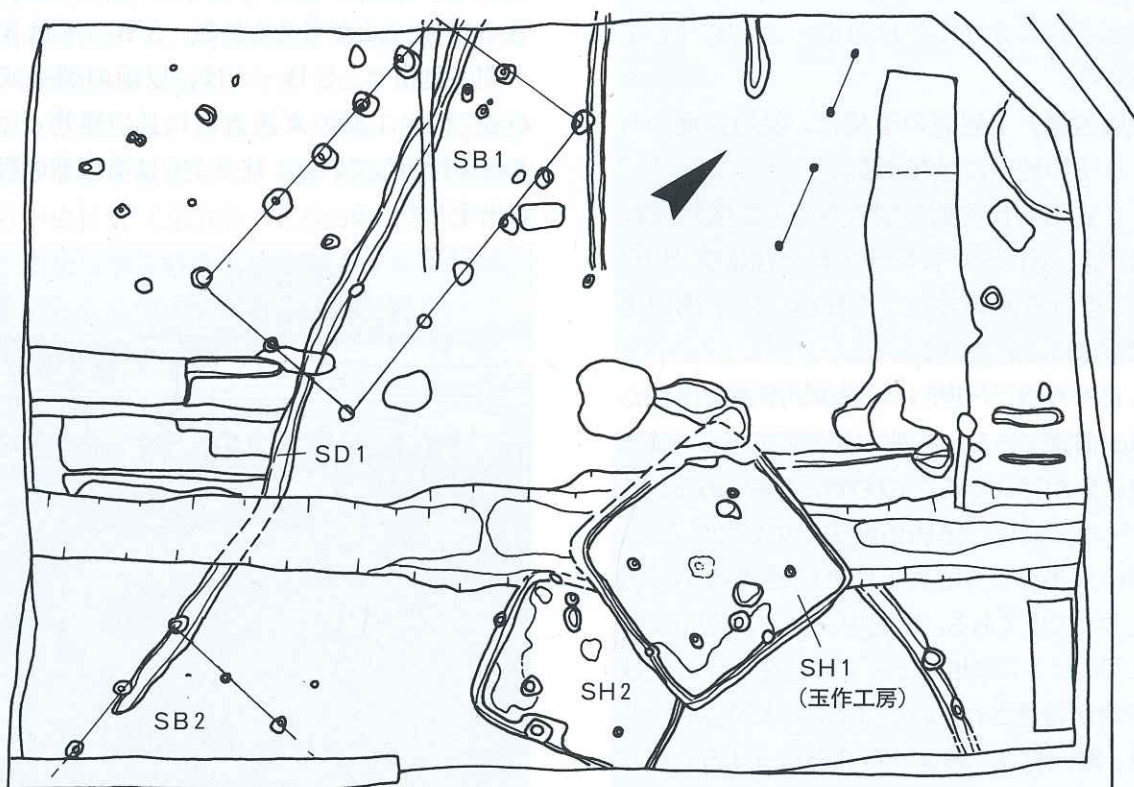


T 2 上層面遺構図



S = $\frac{1}{8}$

SH 2 出土遺物

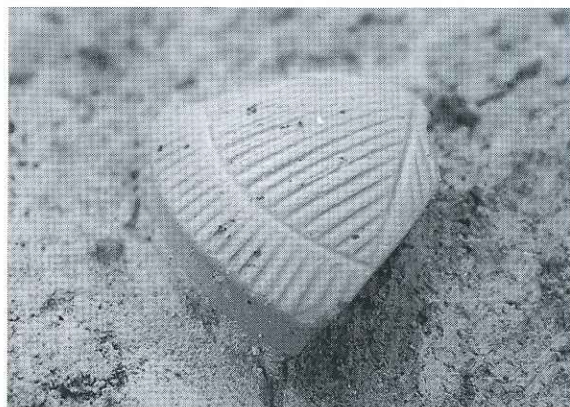


T 1 上層面遺構図

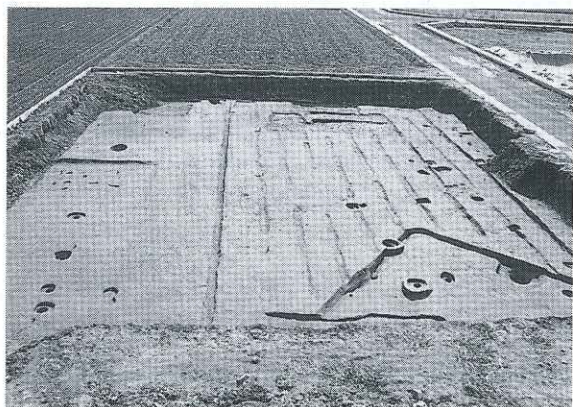
0 10m



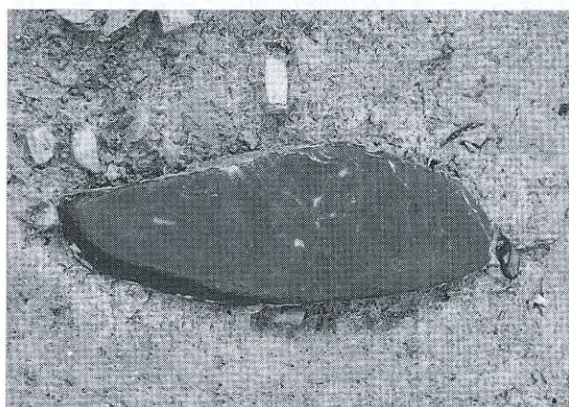
T1SH1・2 (西から東方向)



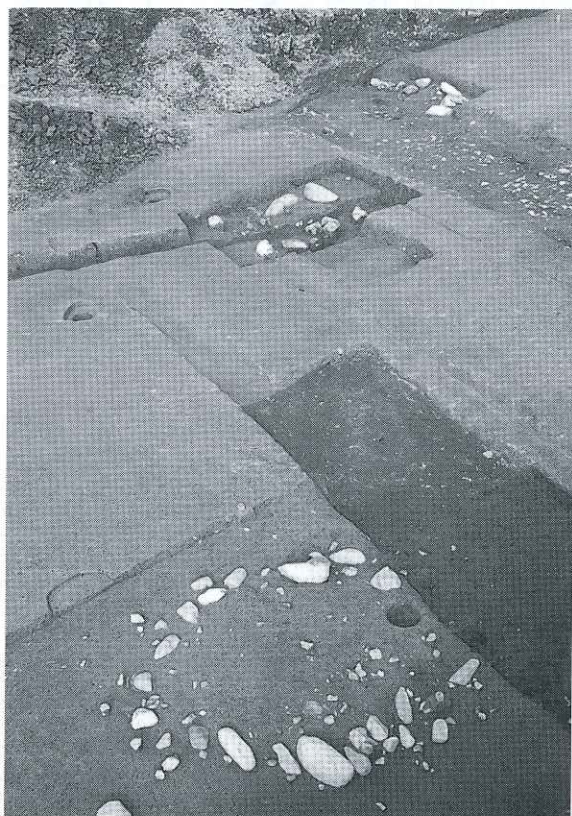
T1SH2 出土石製合子



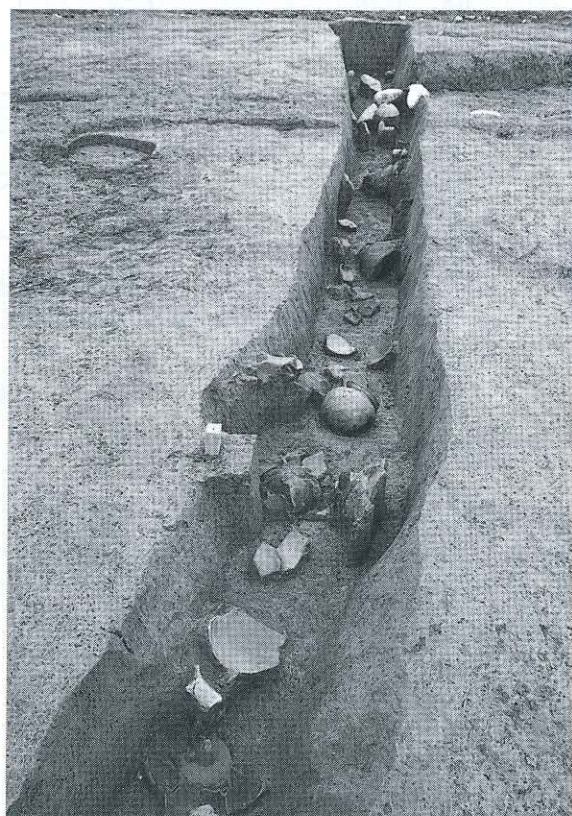
T2 調査地全景



T1SH1 出土菅玉未製品と砥石

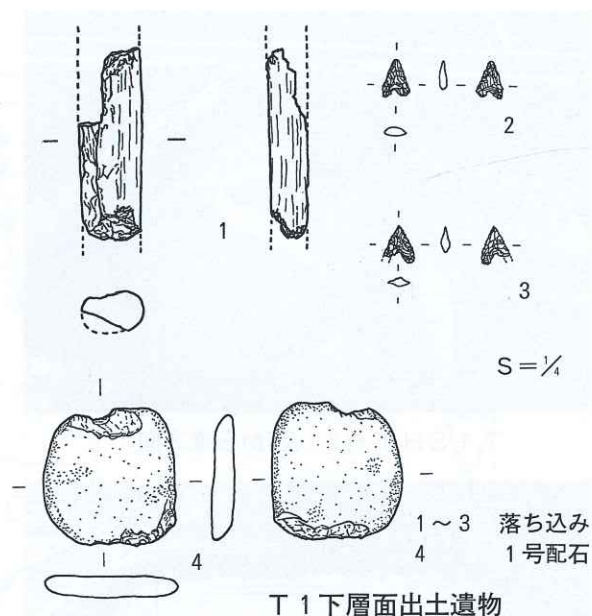


T1 配石遺構群 (下層面)

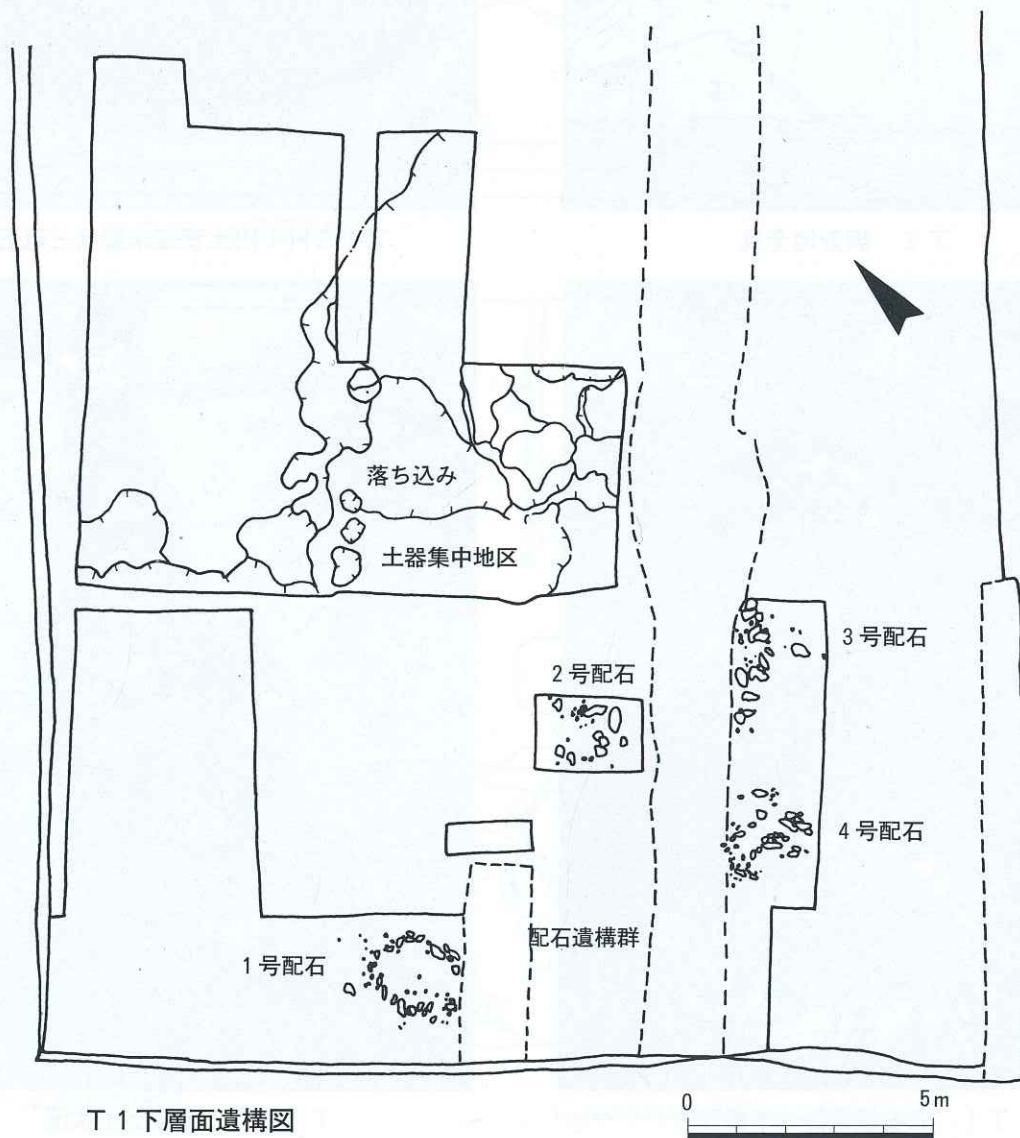


T1SD1 土器出土状況

《下層遺構》下層面の遺構は、上層面から浅い所で5～10cm、深い所で約1m下げた所で存在し、配石遺構、落ち込み、ピット等が確認されている。配石遺構はT1の南側に存在し、4基がほぼ東西方向に並んでいる。残存状況のよい1号配石は、長径約1.7m、短径約1.1mの楕円形である。人頭大の石を東西にひとつずつ並べ、他は拳大の石と小石で構成されている。配石内側南半分のほぼ中央から石錘が出土している。4基の配石遺構は、いずれも土坑や火を受けた痕跡は認められなかった。周辺の落ち込みからは、まとまった後期の土器が出土し、配石遺構とほぼ同時期の所産である可能性を考えておきたい。(近藤)



T1下層面出土遺物



T1下層面遺構図

⑱ 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字辻地先

調査期間 1998年2月9日～3月31日

調査面積 514m²



調査地位置図

辻遺跡は縄文時代前期以降、さまざまな時代の遺構遺物を残す複合遺跡である。とりわけ古墳時代のそれは、大型掘立柱建物や石製品工房跡など、興味深い資料を提供する大規模な遺跡として知られ、隣接する高野・岩畑遺跡と共に野洲川流域における代表的な集落



調査地全景

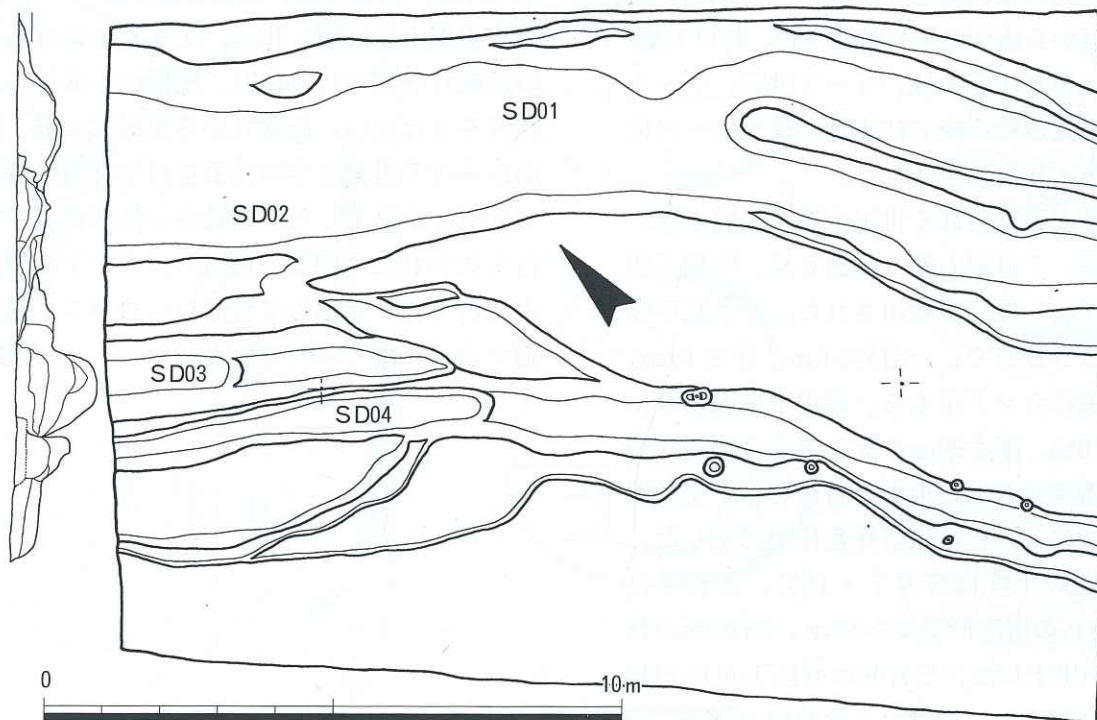
群を形成している。

今回の調査では北西に流れる4条の流路跡が発見された。

流路には重複関係があり、古墳・奈良時代と中世の二時期に分けられる。流路1・3は前者であり、流路2・4は後者である。

流路幅は、おおむね2～3m、深さは0.5～1.4mを計り、いずれも勢いよく流れていたことを物語るかのように厚い砂礫層の埋土層を残している。

出土遺物には須恵器、土師器、黒色土器、白磁などが見られる。(大崎)



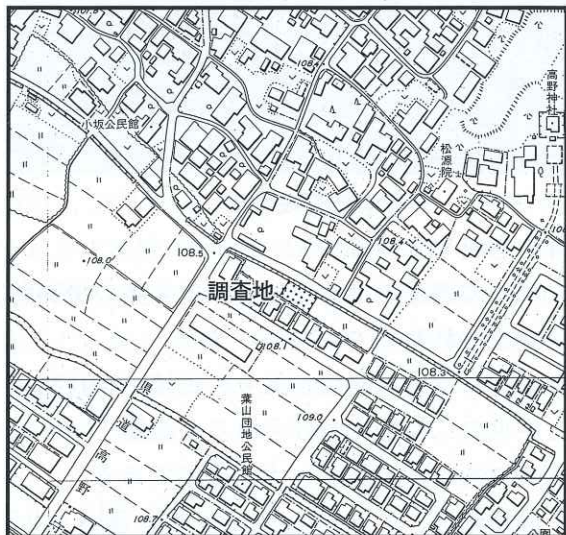
調査地遺構図

⑬ 岩 畑 遺 跡

調 査 地 栗東町大字高野467-2

調査期間 1997年 7月22日～8月31日

調査面積 240m²



調査地位置図

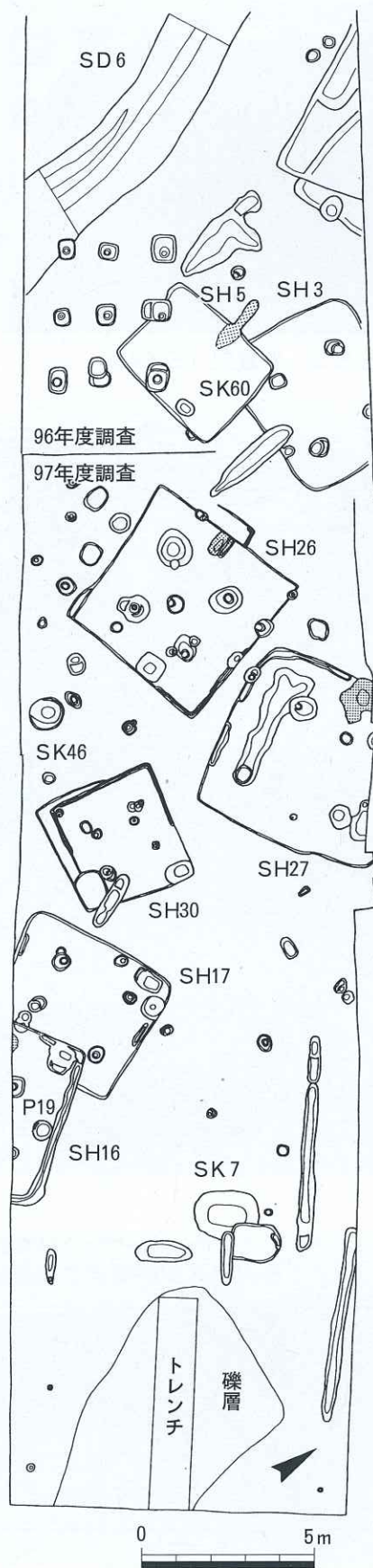
町道路拡幅に先立つ調査である。古墳時代の集落遺跡である岩畑遺跡の西端付近で高野遺跡に接する地点である。当調査地点の西隣と東側は先年度に調査が実施されており、6世紀中葉から後葉の竪穴住居1棟、井戸1基、7世紀の竪穴住居4棟、6～7世紀、6～9世紀と推定される掘立柱建物3棟や13～14世紀の土坑1基が検出された。

今年度の調査では6世紀の竪穴住居1棟、土坑2基。7世紀の竪穴住居3棟。時期不明の竪穴住居1棟等が検出された。6世紀の竪穴住居はSH26で、一辺約4.8m、深さ15cm。北辺中央にカマドをもち、南辺中央東寄りには80×70cm、深さ90cmを計る方形の貯蔵穴がある。遺物は6世紀前葉の特徴を示す土師器の杯(図の4)と須恵器杯蓋片が出土した。

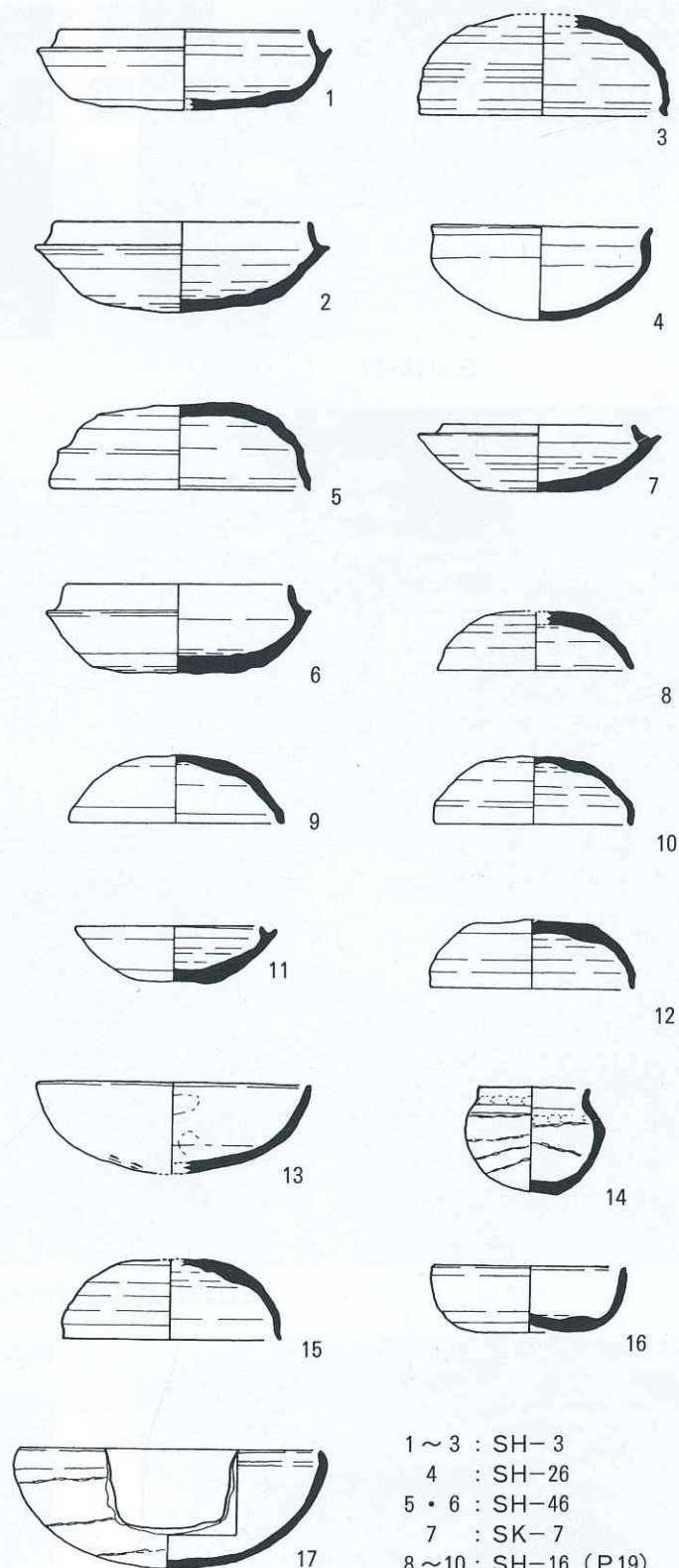
6世紀の土坑はSK7・46で、SK7は1.9×1.5mの楕円形で深さ50cm、須恵器の杯身(7)が出土した。SK46は直径1mの円形で、深さは1m、底部から須恵器の杯身、杯蓋(5・6)が出土した。

7世紀の竪穴住居は、SH30・17・16である。SH30は3.6×3.2m、深さ約8cm、北東端に80×50cmの長方形で深さ52cmの貯蔵穴をもつ。カマドの痕跡は確認できなかった。西側には立て替えの跡がみられる。時期決定に耐えうる出土遺物は無いが、小型化しているため7世紀のものと考えておく。SH23は4.1×4.8m、深さ7cm。北端に90×50cm、深さ50cmの長方形の貯蔵穴をもつ。西側に深さ10cmの段がある。SH16は一辺5m深さ3cm、北辺中央にカマドを持ち、SH17と同様に北端に貯蔵穴(SK45)がある。80×90cm、深さ5cmの平坦面がある二重構造になっている。貯蔵穴底部から須恵器杯身・杯蓋(11・12)土師器(13)が出土。また、床面にあるP19から杯蓋(8・9・10)が出土した。この杯蓋は身として使用したものかもしれない。これらの土器は、7世紀前半の特徴を示す。SH27は方位からSH16と同時期の可能性がある。

先年度の調査であるが、SH5とSH3の遺物を図示した。SH3は5×4.2m、深さ20cm、6世紀前半の須恵器が出土。SH5は3.8×3.1m、深さ34cm、北辺中央にカマド、南辺中央東よりに50×40cm、深さ50cmの楕円形の貯蔵穴をもつ(SK60)。規模が小形化し、柱穴をもたない。貯蔵穴から土師器の壺、床面からは7世紀後半の特徴を持つ杯蓋、杯身(15・16)が出土した。口縁から体部にかけて打ち欠かれた土師器の杯(17)はカマドの煙道内に打ち欠いた部分を焚き口にむけて、煙を通すように据えられていた。(佐伯)



調査地遺構図

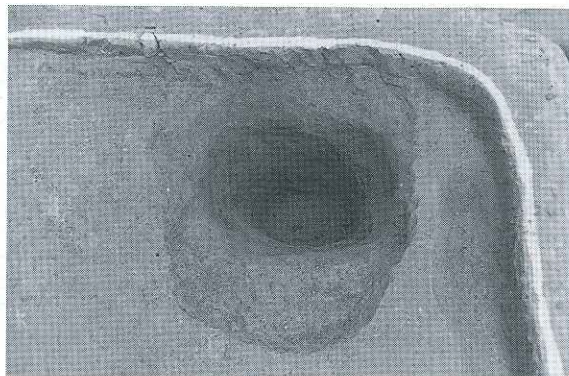


出土遺物実測図

- 1 ~ 3 : SH- 3
- 4 : SH-26
- 5・6 : SH-46
- 7 : SK- 7
- 8 ~ 10 : SH-16 (P19)
- 11 ~ 13 : SH-16 (SK45)
- 14 : SH- 5 (SK60)
- 15 ~ 17 : SH- 5



SH16・17



SH16 貯蔵穴 (SK46)



調査地全景 (北西から撮影)



SH5



SH5 カマド

国庫補助事業・町事業 埋蔵文化財発掘調査

1997年度国庫補助事業調査

No	遺跡名	所在地	調査期間（現地）	原因	調査面積		ページ	担当
20	小柿	中沢 116-1	970630～970804	個人住宅建設	90㎡	竪穴住居 2 棟（弥生）	49	藤岡
21	手原	手原 5 丁目1213-2	971105～971119	個人住宅建設	90㎡	掘立柱建物・土坑・溝（平安）	51	雨森

1997年度町事業調査

No	遺跡名	所在地	調査期間（現地）	原因	調査面積		ページ	担当
22	狐塚	安養寺 7 丁目	980331	民間造成工事	246㎡	溝・流路（古墳～奈良）	52	佐伯

②0 小 柿 遺 跡

調 査 地 栗東町大字中沢116-1

調査期間 1997年6月30日～1997年8月4日

調査面積 450㎡



調査地位置図

はじめに

小柿遺跡は栗東町の北西部、野洲川によって形成されてきた沖積平野にあり、葉山川左岸に位置する。

過去の調査によれば、集落跡は、縄文時代では後期から晩期にかけての竪穴住居・遺物が確認されている。弥生時代では、後期を中心とした竪穴住居が確認され、古墳時代初頭までで存続することが確認されているが、これ以降は、奈良時代まで顕著な集落跡は確認できていない。

集落の他には、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓が確認されている。旧河道は、竪穴住居の分布地帯以南で、弥生時代から奈良時代に至る時期のものが確認されているが、平安時代前期までに廃絶している。また、掘立柱建物も、平安時代前期には、正南北方向から、栗太郡主条里方向を採ることが確認でき、当該期には、現在に近い景観が形成されたと思われる。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、弥生時代の竪穴住居を検出した。以下その概略を報告する。

基本層序

基本層序は上層から順に、層厚約75cmの整地層（バラス層）。層厚約5cmの灰褐色粘質土層（耕土）を経て、黄褐色粘質土層の地山（遺構面）となる。耕土直下に弥生時代の遺

構面が存在し、当該期以降の遺物・遺構は確認できなかった。

遺構の概要

検出した遺構は竪穴住居2棟であるが、調査面積が小さく、いずれも住居の半分程度の平面規模の検出に留まった。

SH-1：検出平面規模は4m、残存壁高は約15cmを計る。平面プランが全体に丸味を帯びている。このため、円形プランを呈し、直径は約8mと推定できる。

住居内部は、中央部に直径1.1mの炉跡が存在し、周囲に土堤が巡る。主柱穴は、1カ所を確認したに留まった。

出土遺物には、弥生時代中期後半の所産と思われる、甕・高杯などを確認した。

SH-2：検出規模は2.7×1.9mで方形を呈する。残存壁高は約15cmで、南側には、幅6cm、床面からの深さ2cmの壁溝を検出した。主柱穴は、西側に1カ所確認した。

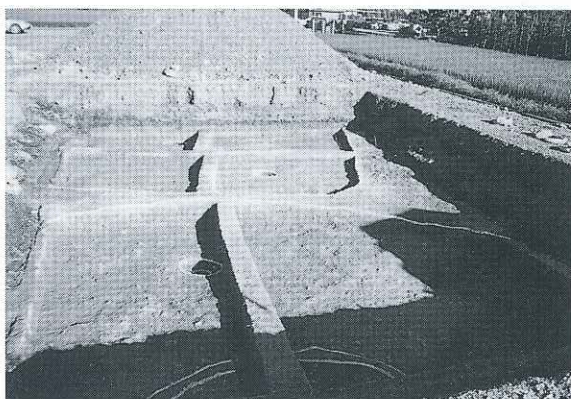
出土遺物には、弥生時代後期の甕などを確認した。

まとめ

今回の調査では、弥生時代中期後半と後期の住居を検出した。これにより、集落の形成が弥生時代中期後半に溯ることを確認した。また、円形住居と方形住居の同一集落における、時代的な連続性も確認でき、小柿地区における集落形成を知る上で、重要な資料を得ることができた。

小柿遺跡の弥生時代集落は、治田西小学校の東側を中心に確認されているが、時代変遷や分布範囲を含め、その解明に期待したい。

（藤岡）

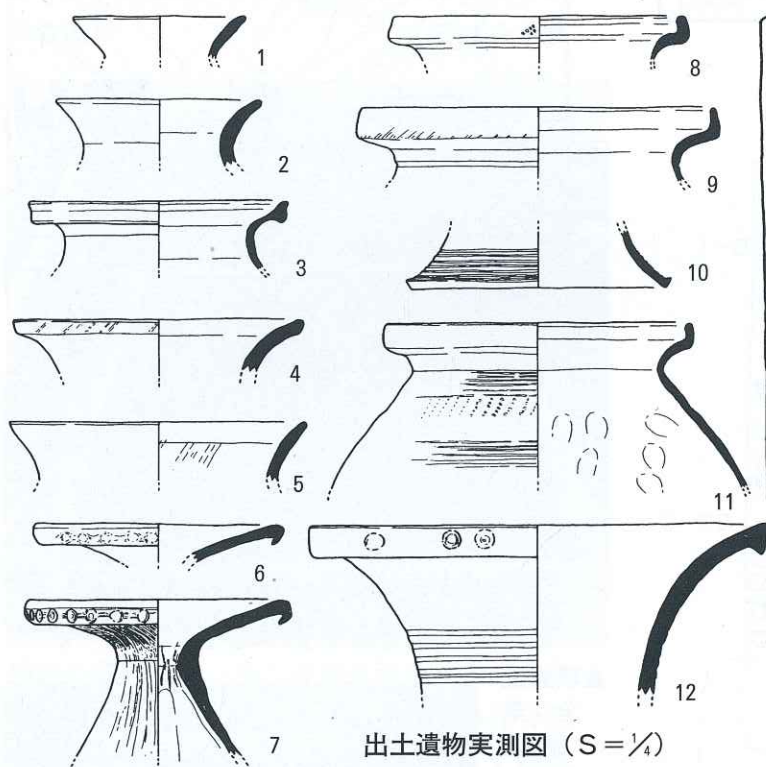


調査地全景

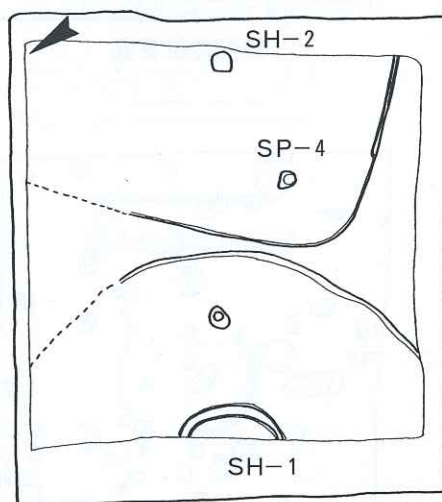


小柿遺跡弥生時代竪穴住居位置図

(S=1/2000)



出土遺物実測図 (S=1/4)



調査地遺構図

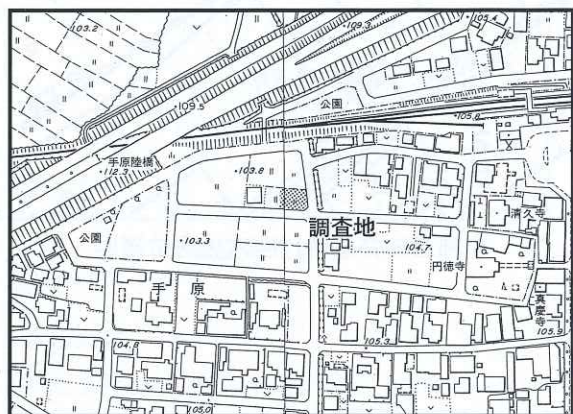
- 1・3・5～7 : SH-2 包含層
 2・4 : SH-2 SP-4
 8～12 : SH-1 包含層

② 手原遺跡

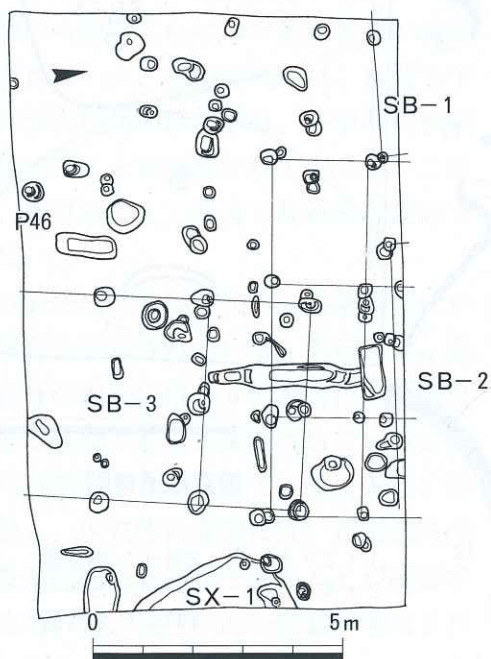
調査地 栗東町大字手原5丁目1213-2

調査期間 1997年11月5日～11月20日

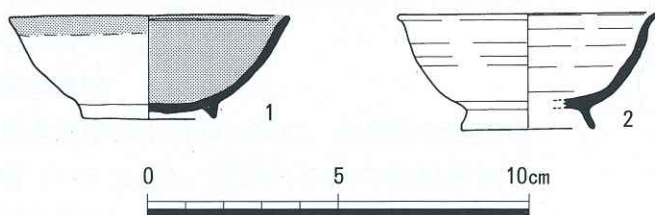
調査面積 90㎡



調査地位置図



調査地遺構図

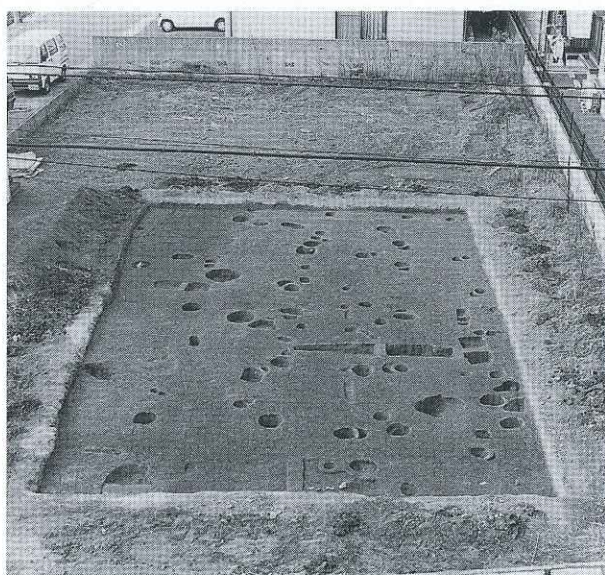


P-46 出土遺物実測図

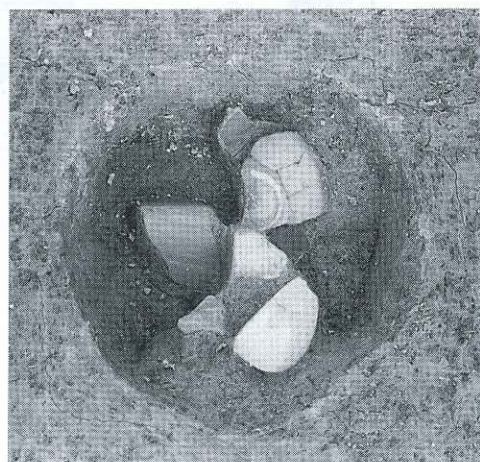
手原遺跡は、古瓦の散布や正方位地割が残ることから、古代寺院ではないかと考えられている遺跡である。本調査区の北隣および東隣の調査区では、白鳳～奈良時代の瓦溜りが発見されている。

今回の調査でも、東端で浅い落ち込み（SX-1）がみられ、古瓦片が検出された。掘立柱建物は概ね平安時代のものである。そのうちSB-1、2は北隣の調査区から連続するもので、SB-1、2とも4間×4間になるものと考えられる。SB-3は、3間以上×2間で、柱穴の規模が比較的大きい。

遺物はP-46から、黒色土器碗、灰釉陶器碗等が出土しており、11～12世紀代のものと考えられる。（雨森）



▲調査区
全 景
(東より
見る)



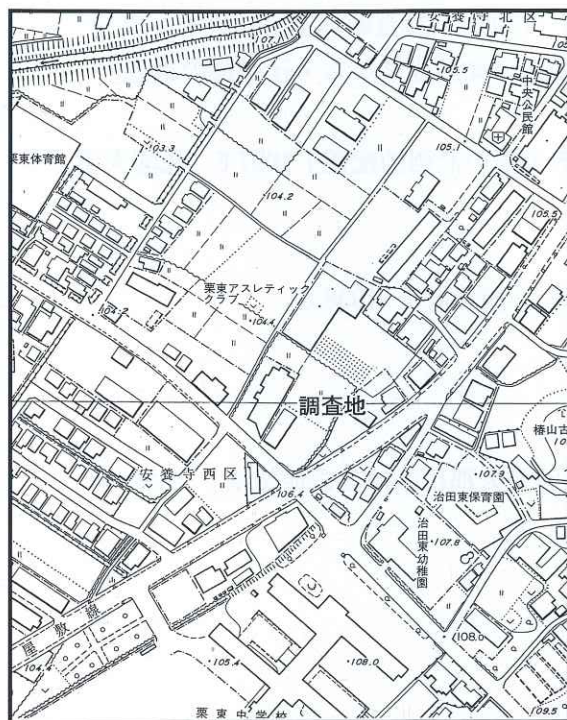
▲P-46 遺物出土状況

② 狐 塚 遺 跡

調 査 地 栗東町安養寺7丁目

調査期間 1997年3月31日

調査面積 246m²

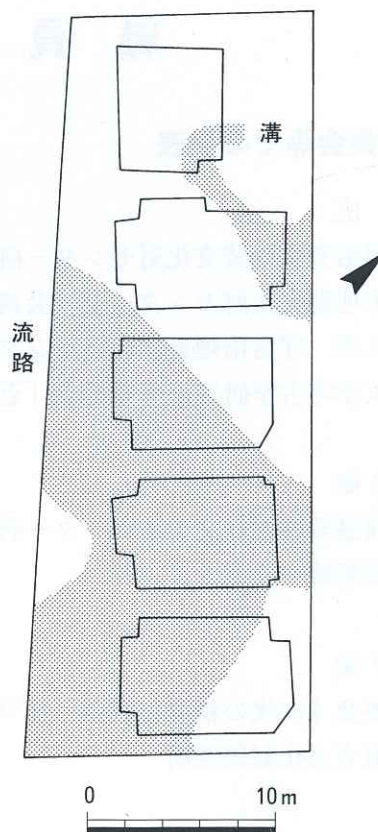


調査地位置図

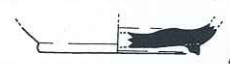
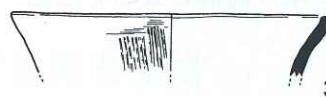
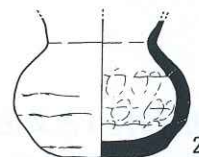
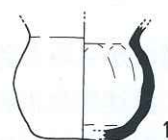
狐塚遺跡は栗東町中央部の丘陵地の端部から南部の沖積平野に展開する複合遺跡である。過去の調査では縄文時代後期の竪穴住居や中世の集落、また安養寺山麓に分布する中期古墳群である安養寺古墳群の支群である狐塚古墳群の確認など、多くの成果があった。遺物では狐塚3号墳の笠形木製品をはじめ律令期では「大殿」「氷室」の墨書土器や無文銀銭等が出土している。当調査地は安養寺古墳群の椿山古墳（帆立貝形、墳長約99m、5世紀）に隣接する地点であり、調査地北隣では古墳時代中期（5世紀）の円墳1基や方墳5基が確認されている。

今回の調査は確認調査で古墳時代中期と奈良時代の遺物を包含する流路または溝状の遺構を確認した。

(佐伯)



調査地遺構配置図



出土遺物実測図

職 員 の 活 動 記 録

◎研究集会等での発表

近 藤 広

- ・第71回滋賀県埋蔵文化財センター研究会「辻遺跡」 1998.3 滋賀県埋蔵文化財センター
- ・守山市埋蔵文化財センター友の会講演会「栗東の最近の発掘成果から・辻遺跡の調査」
1997.5.25 守山市埋蔵文化財センター
- ・花園大学考古学研究室春季総会「近江南部における古墳の計画的配置」 1997.6 花園大学

佐 伯 英 樹

- ・第71回滋賀県埋蔵文化財センター研究会「岩畑遺跡」「綾遺跡」 1998.3
滋賀県埋蔵文化財センター

雨 森 智 美

- ・研究集会『古代の稲倉と村落・郷里の支配』「近江国栗太郡における倉庫遺構」 1998.3
奈良国立文化財研究所

◎論文・研究報告他

近 藤 広

- ・「単位集団の構成からみた弥生から古墳時代の集落ー近江野洲川流域の例からー」
『古文化論叢』伊達先生古希記念論集 1997.4
- ・「古墳の計画的配置と首長権の移動」『滋賀考古』第18号 滋賀考古学研究会 1997.8
- ・「石製合子片と多量の鉄器が出土ー辻遺跡ー」『滋賀文化財だより』No.230 1997.4.25

佐 伯 英 樹

- ・「地山古墳の再検討」『古文化論叢』伊達先生古希記念論集 1997.4
- ・「古墳時代後期の井戸を発見ー岩畑遺跡ー」『滋賀文化財だより』No.230 1997.4.25
- ・「下戸山古墳の周溝と葺石を確認ー下戸山古墳ー」『滋賀文化財だより』No.230 1997.4.25

雨 森 智 美

- ・「滋賀県」『第42回埋蔵文化財研究会資料集 古代寺院の出現とその背景』 1997.8

藤 岡 英 礼

- ・「戦国期における在地城館の構成秩序についてー特に奥熊野地方を中心にしてー」
『中世城郭研究』11号 1997.8
- ・「大和の環壕集落」『第14回全国城郭研究者セミナー資料』 1997.8

発行日 1999年3月1日

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団

埋蔵文化財調査課

滋賀県栗太郡栗東町大字下戸山47番地 〒520-3011

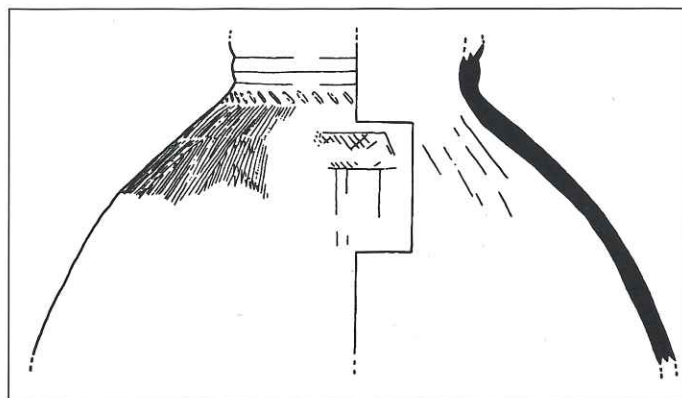
栗東町出土文化財センター内

TEL 077-553-3359 FAX 077-553-3514

印刷・製本 (株) スマイ印刷工業

滋賀県栗太郡栗東町大字川辺568-2 〒520-3014

TEL 077-552-1045(代)



下鈎遺跡⑩出土絵画土器 (S = 1/4)